
魔法粒子コジマ

水没王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法粒子コジマ

【Nコード】

N9578Q

【作者名】

水没王子

【あらすじ】

目覚めるとそこには大男が居た。

曰く、自称『ゲイヴン』らしい。「変な嘘はつくな!!」

これは変態と魔法粒子『コジマ粒子』の物語である……

この物語には過度なコジマ粒子が含まれています。

大変危険なのでお気をつけください……

一話 目覚めると……（前書き）

どうも、水没王子です。

処女でs……げふんげふん、処女作です。

温かく見守ってください……

たまにAMSから光が逆流するときがあるかもしれません（笑）

一話 目覚めると……

『フンッフンッフンッ！！』

ん？……何か熱気のようなものを感じる。

『フオオオオオオオオオ！！ハアッ！！』

うわっ！何か飛んできた！液体が飛んできた！？

「誰だっ！」

『おっ？起きたか』

真っ白な空間の中に自分一人。ふう誰も居なかつ

『何を無視している』

スイマセン……変なのがいます。

『誰が筋肉変態ゲイヴンかあ！！』

「いや！そんな事全然言っつて無いし！！てかゲイヴンって（笑）」

なんだコイツはジョシユアか？自動人形か！？それとも古王かっ！！

『まあ言っつならばイケメンランク1……筋肉王子だ』

いや、まあ確かに筋肉は1番だけど……顔はナツパ……

『シャーラアアアアップ!!』

「うるさっ！肺活量凄いな」

『フッフ……我ほど鍛えればこの程度余裕である』

まあ確かに筋肉の度合いが……なんていうか……やばいからな。でもその紐パンにビキニは止めてくれ。どうみても某乙女な三国志のチヨウセンさんだ。

『む？何やら変な事考えてなかったか？若本的な何かを』

「……まあそんな事はどうでも良い。アンタは誰だ？」

『神だっ!』

「上田さんね……ウエダなら聞いたことあるけど、カミダは滅多に無いな」

『違っっ！GODだよ!!』

……じゃあ仕方ない。取り敢えずはそれで納得しとくか。

「じゃあ神様が何の様だ？」

『ふむ、貴様は死んでしまったからな。私の所為で』

「……ねえ普通は小さい美少女か幼女が土下座で謝ってそこからウハウハな展開になるもんじゃねえの？」

『ふむ、そうなる者もいるが、貴様は違う。しかも私の知り合いに美少女も幼女もない』

だろうなっ！！ガチムチゲイヴンだからな！！

『さて、君が死んだ理由はどうでも良いが』

「ちょっと待て……まず座れ」

『……花の慶次のネタをしても最近では通じる人間は居らんぞ？』

……知っていたのはアンタが初めてだよ。これすると普通に友達が座るからな。自分としてはこつ腰を徐々に下ろしながらいつでも跳びかかれる様に……

「つて！お前がするな！！」

『むっ！？ダメなのか？』

「リアルにやられたらホントに焦るわ。身体が身体なんだからな」

『誰がムキムキ筋肉お化けだ！！』

「だから自爆するんじゃない！！」

五分後

「はあはあはあはあ……」

ネタのやり取りが続いてやっと落ち着いた。

『ハアハアハアハア（／＼／＼）』

「頬を染めるな！！」

『やらないか？』

「やるか！」

『やってくれるのか！？』

「そっちの意味じゃねえ！！！」

『そうか……なら良い。じゃあ本題に入るぞ？』

「やっとか……で？」

『うむ、貴様には転生をしてもらう』

「よっしやー！！！」

『が、基本能力は高いが、特殊スキルは一つだけ選べる。ちなみにアカシックレコードの変更とかキイなのは無しな。出来ればこの中から決めてもらいたい。てか決めろ』

筋肉神が一枚の紙を渡す。オイ、紐パンから出すな。渡された紙には……

ウホツな能力

輝く汗な能力

ムキムキな男

アクアビットマン！！

……ろくな選択肢がねえ！！

『ふむ私的にはウホツな能力がオススメなのだが……』

「嫌じゃー！！」

えつと……裏は……なんか黄色い所があるが『ん？漏れたか？』……最低だ。えつと

水没王子な能力

興 コイツ的な能力

二人とも弱いじゃねえか……

コジマを操る能力（有害ではない）

……これじゃね？あってももう一つある。

俺（筋肉神）になれる能力

コジマを操る能力だな。

『ひどいつー！』

「心を読むな！！まあ取り敢えずこの能力にするよ」

『はいコジマー丁ー！』

「どこの蕎麦屋だ」

『私的には中華蕎麦だ』

いや、いまどき中華蕎麦とか言う奴は滅多にいねえよ……

『よしっならば転生先に送るぞ？』

「えっ！ちよっ！？場所は！？」

『ムラムラムラムラ・ムツラムラ 飛んでけえ』 裏声

「気持ち悪い声で言うなああああああ………」

『ちなみにネギまの世界だから』 念話

ちよっ！あの世界でコジマかよ！？

『ふう……あいつが死んだ理由が私の汗の所為だと知ったら怒るだ

ろづが……何とかなったか』 念話

聞こえているぞっ!?! てか一回死ねえええ!!

こうして私はネギまの世界に飛ばされた……最悪だ。

一話 目覚めると……（後書き）

後悔はしている。反省はしていない。

ネギまの世界へと飛ばされてしまったコジマ（仮）
彼の運命は一体……

次回、正義の味方アクアビットマン！
第二話、コジマが俺を呼んでいる！！

嘘です（笑）

「二話 ナギ」お前仲間になれ！「穴」はい、そのつもりです」（前書き）

どうも水没王子です。

起きてから直ぐにこの小説の評価を見てみたら既にお気に入りが入りが五人。

多分レイレナード社の生き残りなんでしょうね（笑）

「こんな物を見て喜ぶか！変態共が！」

「面妖な……」

コラッ！そんな事言っんじゃありません。

こんな馬鹿な文章（後半になっていくと少しはまともになっていくと思います）ですが今後ともよろしく願います。

「二話 ナギ」お前仲間になれ! 「穴」はい、そのつもりです」

「目覚めると……戦場でした」

右からは戦艦、左からも戦艦。これやばくないですか？

『ゴメン グレートブリッジに送っちゃった』 念話

このクソゲイヴン!!

「オイ! 人間が居るぞ!!」

「連合の人間か!!」

……………ピンチじゃね？

「……………百重千重と重なりて走れよ稲妻、千の雷!!」

って! 何でいきなりそんな呪文を!?! いやー!!

『ドゴオオオオオオン!!』

「ふっ……………所詮人間など……………なにっ!?!」

「生きてる?……………これって、コジマ粒子?……………フフ、フフフ、フフフフ」

ヤバイ、コジマ粒子は千の雷を止めたぞ。しかもプライマルアーマー (以後PA) が消える気配は無い……………てことは最強?

帝国の戦線は……完全に崩壊した。

帝国軍超弩級戦艦艦長

「前方に魔力反応！敵は一人です」

いつの間にかここまで入り込まれた？まあ良い、排除するだけだ。

「主砲放てー！！」

私の声と共に敵の若い男に主砲が放たれる。これなら鬼神兵でも一撃で消せる。残念だったな。男に直撃するところを見届けて作戦を練り直そうと戦局図を見ようとしたその時

『ミサイルカーニバルです。派手にいきましょう』

先ほどの男が大量の魔力で出来た誘導弾のようなもので攻撃してくる。主砲で死なないのか！

「対魔力障壁！！」

戦艦の周りに大量の障壁が張られ相手の攻撃を防ぐ。しかし

「艦長！！障壁がどんどん消えていきます！！」

「な、なにっ！？」

オペレーターの声を聞き慌てて外を見る。そこには数百発の緑色の誘導弾が魔力障壁を完全に消滅させている映像。そして、こちらに向かってくる映像。

「そ、総員退避してください！！」

「おお……神よ……」

私の意識はそこで途絶えた。

「すげーすげー………どんどん艦隊が沈んでいく」

コジマミサイル（実際はコジマ粒子で出来た誘導弾）を大量にばら撒きながら艦隊が沈んでいくのを見る。

「まさかここまで凄いなんでなあ………しかも有害じゃない得点付き。これはあのゲイヴン様に感謝しないとな」

『貴様アアア!!許さん!』

帝国軍の騎士?達が大量に向かってくる。多分数としては50人ぐらい?まあ考虑的にはこっちはAC、あちらはノーマルといったところか?まあ他の技も試したいし……相手したやるか。コジマ粒子を剣の形に集束させてっつと

「これぞ、集束されしコジマの剣」「コジマカリバー」

『そんな魔力で出来た剣など!!!』

敵は障壁を張って防御するが……はつきり言ってコジマには障壁は無駄らしいからな

「私には、お前が止まって見える」

『なにっ!?障壁が消えていく。ギャアアア』

うわぁ……真つ二つだ。気持ち悪いなこれ……でもまあ精神的な所も神様から改造してもらっているようでは何とかなる。

『き、貴様何者だ!!!』

「アクアビットより生まれし正義のヒーロー……アクアビットマンだ!」

……ごめんなさい。言いたかったです。だからその冷めた眼は止めて帝国騎士の方々!!よし、ここはアイツの台詞を借りよう!

「……いけるな貴様ら？まあ空気でも構わんがな」

『舐めるなあああ！！』

そつそつ、この空気だよ。こつちが求めていたのは……

「じゃあ逝こつつか？」

Side ナギ・スプリングフィールド

「ナギ！どうするんだこれ！？」

「へっこんなもの……百重千重と重なりて走れよ稲妻、千の雷！！」

「全く……馬鹿げた威力ですね」

「全くじゃ」

俺はナギ・スプリングフィールド。今グレートブリッジ奪回作戦の途中だ！それにしても敵が多いな……先に後方艦隊を潰すべきなのか？

「アル！後方艦隊はどんな様子だ？」

「はい……………壊滅しかけています」

「はあ？どついつことだ？」

「誰かが潰しているみたいです。えっと一人で」

マジかよ。あの艦隊は帝国の本隊だぞ？しかも帝国騎士たちが居て面倒なはずなんだが…………

「ジャック！行ってみようぜ！！」

「おつっ！じゃあ後は頼んだぜ！」

「全く……………貴方達は……………」

「仕方ないのう。さっさと行っていい」

「ナギ！あまり遠くに行くなよ！！」

全く、詠春はうるせえなあ……………お前は俺の親か？まあ良いけどよ。

「よっしゃじゃあ行くぜ！！」

「マジかよ」

「こりやすげーな」

帝国後方艦隊の所に着いたところには既に帝国軍は撤退していた。そこに立つ一人の男。服は蒼のコートに黒髪赤眼。そして……周りを渦巻く緑色の魔力。

「おいっ！」

『……なんだ？つて紅き翼！！』

「おっ俺達の事知ってんのか！？」

『そりゃ有名だからな』

そんなに有名だったか俺ら？まあ良いや。

「これはお前がやったのか？」

『そうだが……それにしてもお前達は何で来たんだ？』

「へっへっへ……それはな」

なんかジャックが考えているけど……それより俺はコイツを仲間にしてえ！！

「戦う「俺達の仲間になれ！！」……おいナギ、戦ってからだろ？」

『……別に戦っても良いが……今からか？』

「おっつ！じゃあいくぜ！！ナギは見てろ」

全くジャックは戦うことしか考えてねえ お前が言うな

「……これでコイツの力が分かるから良いか。じゃあどこまでやれるか見せてもらっせ！」

Side 正義の味方、アクアビットマン（仮）

「はあジャック・ラカンと戦うはめになったな。……これ自分ほどの程度強いか分かるな。出来たらラカン以上だとありがたいな。」

「じゃあこっちからいくぜ！！ラカン本気で右パンチ！」

『ブオンッ！』

「PA全力展開」

PAを展開してラカンのパンチを受ける。先ほどの敵と違ってラカンの攻撃は貫通とまではいかないが吹き飛ばされる。

「は？こんなもんか？」

……ビックリしたが、ダメージはゼロ。今度はこっちの番だな。

「じゃあ今度はこっちだな。ミサイルカーニバルです。派手にいきましょう」

「うおっ！なんだよこの数！！」

ラカンに向けてコジマミサイルをおよそ300発発射。その間に自分の右手にコジマを集束。

「ちっ！面倒だな。気合防御！！」

ラカンの気合によってコジマミサイルが全弾破壊される。どんだけ……というか、名前は気合防御じゃなくて気合迎撃じゃないか？だが、こちらも充電完了だ。

「残念ながら……終わりだ」

一気にラカンの懐まで瞬動？して拳を叩き込む。

「うおっ！！」

「希望の閃光」
エーレンベルク

右手に集束されたコジマ粒子が一気に閃光となって放出。普通の間なら死ぬが……

「……こりゃちっど痛いな」

「ちっどで済むなら貴様はバグキャラだ」

「こんなの使えるお前もおかしいぜ？」

ラカンと二人笑い合う。まあこんなもんで良いだろ？ラカンにも通
用するということは分かったし……

「まあこんな所で終わりたいんだが？」

「俺様としてはもう少し戦いたいところだが……まあ良いぜ。おい
ナギ！」

「ああ……お前仲間になれ！」

「はい、そのつもりです」

あえて逆流王子の（声も）真似をする。

それからの突っ込み（ゲイヴンの意味ではない）を期待するが……

「よっしゃ！じゃあよろしく頼むぜ、俺はナギ、ナギ・スプリング
フィールドだ」

「で、俺様はジャック・ラカンだ」

……まあ分かっていましたよ。それにしても名前か……コジマ粒子
が使えるから……

「トーラス・レイレナードだ。よろしくな」

まあこんな所だろう。

「よろしく頼むぜ、トーラス！」

「ああ……よろしく、ナギ」

「これからは忙しくなりそうだな。」

……なんか胃が痛くなってきた。コジマ汁飲んでおくか。

二話 ナギ「お前仲間になれ！」穴「はい、そのつもりです」(後書き)

> () { } ~ ~ ~
> () { } ~ ~ ~
> () { } ~ ~ ~

ゴリは決して、ゴスロリではありませんのであしからず……

二話……こんな感じになりました。いかがだったでしょうか？
主人公の名前はトーラス・レイレナード。

簡単な解釈、トーラス 変態企業

レイレナード 壊滅する

トーラス・レイレナード 変態、いつか死ぬ。

といった不吉な名前に……まあ一回死ぬと強くなる可能性もありますからね(笑)

某水没する人とか、サイヤ人とか……

では予告！

第三話 正義の味方、アクアビットマン！

「俺の名前を言ってみろ」

「そ、その紙装甲は……た、たしか……そうだアクアビットマン！
アクアビットマンだ……！」

「紙装甲言っ……！」

第三話、いかに装甲は紙でも俺の心はオリハルコン

嘘です(笑)

三話 最終決戦（はやっ）（前書き）

とうとうお気に入りが10件に……

嬉しい限りです。

イクバルの魔術師こと鯖味噌さん、残響死滅さん、感想ありがとうございます。

感想によって水没王子のモチベーションが大変高まりました。

こんな感じに 自分はハラショー！！

周りから（主に女子高生）の冷めた眼

それと、これをご覧になるコジマ汚染者の方は を百回ぐらい繰り返し返してください（笑）

では第三話をどうぞ

三話 最終決戦（はやっ）

「モグ君、モグちゃん……ほら、餌だよ」

「……貴方は相変わらず緊張感無いですね。それとそれをペットにするのは止めませんか？」

「何を言うっ!!可愛いじゃないか!!」

「確かに一匹や二匹なら許せるものの……流石に十数匹となると……」

私は巨大虫籠の中のヨロイモグラゴ　りたちに餌をやる。この可愛さを理解できないとは……アルはまだまだだ。確かにこの前子供が産まれて十匹ほど増えたから餌の量も多くいるようになったし、名前をまだ全員決めてないからちよつと面倒だが……

「そんなもの理解したくありませんが……それにしてもここまで来ましたか」

「読心術だと!そんな事より……最終ダンジョンはやっぱり魔王城モドキか」

「一応、墓守り人の宮殿という名前がありますけど。それはそうと……援軍は来ないようですね」

「テオドラも一応帝国のお姫様だしな」

「貴方がいるなら来ると思っていましたけど……どうやったらあん

なに仲が良くなるんですか？」

「ん？それはな……………」

『トーラス！今日もあの話聞かせてくれんか！…！』

『ほう……………テオドラは良い子だな。じゃあ話してやるっ』

『わぁーい』

『正義の味方アクアビットマン二十八話』

「といった感じだ」

「……………（汗）」

ふむ、やはり純粹な子供たちにはアクアビットマンは人気だな。あの紙装甲にエネルギー効率の悪さ、しかしそれにもめげずに悪に立ち向かう正義の心。

「それは、たしか『AMSから光が逆流する……………ギヤアアア！』の

人ですよね」

「馬鹿、それはフラジールマン（アスピナマンでも可）だ。ちなみに二十三話で死ぬ」

「……死ぬんですか？」

「しかし二十五話では新たにアルゼブラマンが仲間になる。主な兵器はショットガン」

「なんか悪者っぽい設定ですね」

「元は悪者という設定だ」

「………ちなみに何話まであるんですか？」

「百五十話だ」

「………おや、もうそろそろ戦闘開始のようですよ？」

こいつ話を逸らしやがった。まあ良いがな。私はこの戦争が終わったらアニメと戦隊モノを作るんだから死ぬわけにはいかん。

正義の味方、アクアビットマン！

題名はこれで決定だ。

「よっしゃ！野郎共行くぜー！！」

「………アクアビットマンは「トーラス、みんな行きましたよ？」……

…じゃあナギに言つといてくれ、こっちは外を引き受けるってな」

「分かりました。ではご武運を」

「ああ……ミサイルカーニバルです。派手にいきましょう」

さあて……取り敢えずラストミッションだ!!

「トールラス様!!味方の被害が広がっています!!」

「クツ!流石にこのままではジリ貧か……セラス!兵を下げて防御に力を入れる!」

「しかしっ!!」

「その分私が働くさ。じゃあ頼んだぞ」

はあ……確かに敵が多くて面倒だな。ここは一発でかいのを使うか。敵が集中している所に突っ込んで、わあ……敵が一杯こっちに来る

(笑)

「ハラシヨォー!!」

アサルトアーマーをぶっ放す。何度も何度もぶっ放す。

「ハラシヨォーハラシヨォーハラハラシヨォー!!!!」

『グギヤアアアア!!』

敵の魔獣たちの断末魔が響くが止めません。勝つまでは

「ハラシヨォー!!!!!!!!!!」

『ハラシヨォー!!』

おいつ!魔法騎士団の野郎たちが一緒に言い出したぞ!!楽しくなってきた!!

に数回戻る(常人以外は百回)

『ドゴンッ!!』

あたりに響き渡る轟音、そして崩れる墓守り人の宮殿。どつやらナギが決着をつけたようだ。

「終わったようだな。セラス!後は任せた」

「えっ！？トーラス様は何処へ？」

「寝る！！」

「ええ！？」

十八時間後

「全く……やはり貴方はいつもどおりですね」

この声はアルか。わざわざ戦艦内の医務室に来るとは、ご苦労な事だ。

「ん？アルか、他の奴らは式典か？」

「知っていたんですか？全く貴方という人は」

「ついでにゼクトはどっかに行ったか」

「……知っていましたか」

「まあな（やはりこうなる運命だったか。まあ別に良いけど）」

「一応原作は読んでいたしな。しかしなんだ？これから色々起きると
思つと胃が痛くなるな。」

「……アル、私は今から別行動に移る。ナギにそう伝えておいてく
れ」

「これから祝勝会ですよ？良いんですか？」

「それよりも重要な事だ。一つお願いがある」

「コートを身に纏いながら部屋から出る準備をする。」

「なんですか？」

「……私が帰ってくるまで」

「帰ってくるまで？」

「ヨロイモグラゴ　　リの世話を頼む」

「えっ！？それは嫌です」

『バタン』

さてと追いかけてくる前に色々と準備するか。色々と崩落するだろ
うからな……

『崩落開始しました』

「了解、じゃあよろしく頼む。ソルディオス」

『ハイ』

まさかこの大陸が落ちてくるなんて普通の人間は思わないな。まあ私は知っていたから対処できるし、魔力を使わなくても何とかなるからな。

「ポイントAからHまで完了しだい報告」

『ポイントAからEまで完了……………全て完了しました』

ちなみにこれはアルとのアーティファクト、ソルディオス。A Cじやコジマキャノンとかアサルトアーマーしか使えなかったが、こっちは色々と応用が利く。

「全ソルディオス、コジマフィールド展開」

『全ソルディオス、コジマ粒子のラインを接続……同調、フィールド展開します』

八機のソルディオスはそれぞれコジマ粒子で出来たラインで八芒星を作り強固なフィールドを大陸の下に展開する。これである程度は落ちるスピードが変わるはずだ。

『ガガガガガッ！』

大陸がフィールドにぶつかる。最初の衝撃は一番強いからな。これで損害率が……

『……損害率20%……まだ大丈夫です』

「そして問題は……ソルディオス一つ一つに神経を繋げているようなこの感覚だな。流石にこれはキツイな」

『トーラス！貴方一体何をしていますか！！』

そんな時にアルからアーティファクトのカードを通じて念話が届く。

「いやな、お前たちがラスボス倒したからこんな事で埋め合わせしようと思っただな」

『損害率30%……大丈夫です』

『全く、貴方は馬鹿ですね……何か伝える事は？』

「アリカ姫に救助を急げと言ってくれ。流石にずっと大陸を支える事は無理だ」

『分かりました。あなた』

プツツと念話が途切れる。どうやら完全に魔力は使えなくなったようだ。

「何処まで持つか勝負だな……頑張ってくれソルディオス」

『損害率70%……危険レベルです』

「ふっ……まだまだです。まだ落ちませんよ。私のソルディオスは」と言っているものの良い加減に神経が不味い。

『損害率80%……使用停止を提案します』

「拒否だ。さて……避難率は？」

『95%……96』

これは大丈夫か？

『損害率90%……使用停止を』

「拒否だ」

『97…………98…………99…………』

…………100はまだか!?

『少女を確認…………上から落石が』

なっ!? ヤバイこれは目視できるところだ。どうする? ソルディオ
スを停止するか!?

そんな事考えている暇じゃない!!

「間に合え!!」

少女を抱きしめ岩を避ける。しかしPAを展開させてなかった所為
で左目を尖った石で切ってしまった。

「っ! 嬢ちゃん…………大丈夫か?」

「えっ!? う、うん」

「よし、ならば後は帰るだけだな。捕まっているよ?」

私は少女を抱えたまま離宮に急ぐ、出来れば避難率が100になっ
ていることを祈る。

「トールス様…………だいじょうぶ?」

「ん？アハハハ大丈夫だよ。それよりよく私の名前を知っているね」

「だってトーラス様えいゆうだよ？でもけがしちゃった」

「良いよ。こんな怪我、嬢ちゃんを守れたのだったら……」

「わたしはベアトリクス・モンロー。嬢ちゃんじゃない」

「これは失敬、ミス・モンローさてと……もう直ぐ着くよ」

黒髪の少女はこっちを見て、持っていたハンカチを傷に当てる。

「わたしおとなになったらトーラス様のおよめさんになる」

「それは嬉しいな。ほらお母さんだよ」

こっちに向けて手を振ってくる女性、どうやら母親のようだ。やっ
とこれで

『損害率100%……同調、強制解除』

「なっ!?!」

「トーラス様!どうしたの!?!」

ソルディオスが壊れ神経に直接ダメージを与えられているような痛みが襲ってくる。

「がっ!まずい!……せめてこの子だけでも」

少女を母親に向けて投げる。母親の周りにいた大人たちは驚愕した目でこちらを見てくるが……こっちは意識が途絶えそうだ。やっぱり……ソルディオスは停止させるべきだったか……

「トーラス様……！」

「くっ……」

まずい……意識が……途切れ……『これで……イイ』……な
んでゲイヴン……

オスティア崩落

避難率 100%

重軽傷者多数

死亡者 0

行方不明 1名 トーラス・レイレナード

三話 最終決戦（はやっ）（後書き）

はい、とうとう名前フラグの餌食に（笑）

しかし、彼は帰ってくるはずですよ。多分強くなって。

おい、一気に時間が飛んだぞって思った方。

スイマセン、筆者の後ろにソルディオスがありまして、早く原作に入れとうるさいもので……

ちなみに書き溜めていた分はこれが最後なので次からは少々時間がかかるかもしれません。

しかしそんなもので挫ける水没王子では無いので張り切って今週中に四話を仕上げる予定です。

一応ヒロインキャラを決めたいと思うのですが、候補として

いや、木乃香に決まってるし……

普通、刹那だろ？

コジマ兵器がヒロインじゃないんですか？

EVAじゃね？ATフィールド使えるし……

まさかの並行世界リンクスたち……

そんな感じで決めたいと思うのですが、まあ良かったら感想ください（笑）

では予告！

第四話 正義の味方アクアビットマン

「俺はまだ死んでいない！」

そこには四方八方から大型ガトリングガンで撃たれたアクアビットマン

満身創痍の中、彼は必殺技を繰り出す！

「秘儀！！オーバードブースト！！！」

彼は後ろに向かって前進を始める。

彼の未来はまだ終わっていないかった。

第四話 麻帆良よ！私は帰ってきた！！

もちろん嘘です（笑）

四話 学校……良い響きだ（前書き）

やっと書き終わりました。

鯖味噌さん、感想ありがとうございます。今後とも御贔屓に……

これからは一週間に一話を目指して書いていきたいと思えます。
こんな駄文ですが……今後ともよろしく願います。

では第四話、どうぞ

四話 学校……良い響きだ

「まさか貴方が生きているなんて思いませんでしたよ。カードも一度死んだ状態になったんですよ。トールラス」

「トールラス・レイレナードは既に死んだ。ここに居るのはゼロ・ベルリオーズだ」

目の前には優男。紅き翼のアルビレオ・イマである。そして向かいの椅子に座っている男が私、トールラス・レイレナード改めゼロ・ベルリオーズだ。

「まあそんな事はどうでも良いな……アル、彼らは？」

「……既に五十匹ほどに増えています。一応貴方の頼みでしたから」

「そうか……遂に孫までできたか。ありがとうアル」

「え、ええ（汗）」

「じゃあ私はこの学園長の所に行く。無許可で入ってきているし、死人だからな」

「正確に言うと行方不明ですけどね。じゃあ学園長にはよろしく伝えておいてください。ちなみにタカミチ君には私は内緒ですよ」

「了解した」

私はアルの家？である図書館島から出て行く。久しぶりタカミチに

会うな。どんな風に成長しているのだろうか？

「トールラスさん！生きていたんですね。グスツ良かった」

……うわぁ……おっさんが泣いている。

「その……タカミチ？泣いてくれるのは嬉しいが、抱きつくのは止めてくれ」

「あ、す、すいません」

「ふおっふおっふお、まさかお主が生きていたとはこのう」

「えっと近衛近右衛門学園長だったか？私の事は」

「分かっておる。元老院には報告せんよ」

「助かる。それと今の私はトールラス・レイレナードではなく、セロ・ベルリオーズだ」

元老院に居るクルトなら良いが、他の奴らはダメ人間ばかりだからな。

「それと一つ提案なのだが」

「君には理科の教師になってもらおうかの」

「お見通しって訳か。まあよろしく頼む。住居は」

「女子寮の管理人室が空いて居るから使ってくれ」

「了解した。それで……ナギの息子は？」

「ふおっ！？何故それを？」

「学園長がこちらの事をお見通しなように、こちらこそこちらの魂胆はお見通しって訳だ」

「そうか……ネギ君なら明日来る事になっておる」

「ナイスタイミングだな」

まあ実際は色々調べてネギ君が来るのに合わせてこっちに来ただけだな。

「ふむ、トーラス……セロ君、ネギ君の補佐をしてもらえんかの？」

「別に良いぞ。ナギの忘れ形見だ。まあ奴は生きているだろうが……じゃあ私は荷物やらの整理に行くぞ」

「ふむ、じゃあ明日の朝にもう一度ここに来てくれるとありがたいのう」

「分かった。じゃあ失礼する」

「あっ！？待つてください、トーラス……セロさん。僕も手伝いま

す

「ありがとうタカミチ」

「それにしても手紙ぐらい出してくれれば」

「まあ色々あってな。傷の療養もかねて休んでいた」

「そうですね……」

「ガトウは……残念だったな」

「はい……でも僕は師匠の代わりに絶対に」

『高畑先生！』

タカミチと話をしていると前から二人女子生徒が歩いてくる。一人は黒髪、そして一人は

「アスナちゃん、こんにちは」

「こんにちは、えっと……こちらの方は」

「えっと……明日からここで働く」

「セロだ。よろしく頼む」

「セロ先生ですか？よろしくお願ひします。私は神楽坂明日菜です」

「うちは近衛木乃香です。よろしゅう頼みます」

アスナ姫に、詠春の娘か……はあ原作キャラのオンパレードだな。

「よろしく頼むよ。何か分からない事があつたら女子寮の管理人室
においで。そこで生活する事になったから」

「「えっ！」「」

「？……おかしい事なのか？」

「確かに女子寮の管理人は今まで女性でしたから……まあ大丈夫で
すよ」

「そうかな……まあ良いか。じゃあタカミチ行くか」

「そうですね、じゃあね。アスナちゃん」

「あ、ハイ」

「ほな、失礼します」

二人と別れて女子寮に向かう。全く、私の知らない間に大きくなっ
て……

「それにしてもアスナ姫は大きくなったな」

「はい……表情も明るくなりました」

「お前が側に居てやったからだろうな。タカミチ」

「ハハッ僕なんて師匠の足にも及びませんよ」

「大丈夫だ、アスナはお前に惚れている」

「ちよっ！トーラスさん！！」

「ハハハハハ！私はトーラスではない」

Side 別れた二人

「なあアスナ、セロ先生って何歳やるか？」

「えっ？二十代前半ぐらいじゃないの？」

「でも高畑先生敬語使っていたで？」

「そっいえばそっね……うん」

「謎やな」

「それとゼロ先生なんか始めて会った気がしないんだよね……どこかで会ったことがあるのかな？」

「うーんウチは初めてだと思っけど……どうやら？」

「「謎ね（や）」」

Side セロ・ベルリオーズ

「ゼロさん！これはどこに置きますか？」

「それはもう少し奥に頼む、はぁそれにしても管理人室って意外と狭いんだな」

まあそれでも一人住むには十分なスペースがあるんだが……

「ははは、どつちかと言うと宿直室でしたから……えつとこれは？」

「ああそれはその台の上において布を取っておいてくれ」

「分かりました」

アレには私の大事な家族がくバサツく居るからな。

「ちよっ！セロさん！こんな物飼わないでくださいよー！」

「なにっ！？タカミチ、貴様もその可愛さが分からののかー！」

「こんな物の可愛さなんて誰も解りませんよー！」

「ああ……可哀想な鎧土竜たち」

「そんな漢字で書いてカツコよくしようとしても無駄ですよー！」

ちよっ！おまつ！その発言は危ないぞ。

「取り敢えずその台の上だったら目立たないだろ？」

「まあ部屋の一番奥ですが……はあ」

誰も私と家族を離れ離れにする事は出来ない。そう私と鎧土竜たちは一心同体なのだ！！

「これで終わりと……すまなかつたなタカミチ」

「いえ、これぐらいなら……このゴ　　リは生徒に騒がれないようにしてくださいね」

「その時はデカイ団子虫とでも言うておくさ」

「確かに見えなくは無いですけど……それじゃあ僕は仕事があるので」

「ああ……じゃあまた明日な」

「はい」

タカミチは学校に戻る。私が第一にやる事は決まっている。ここに居る吸血幼女に

「会いに行くのではなくて、私の家族に餌をやらないとな」

吸血幼女が私のことを知っているとは限らないしな。

『ジージー』

……ああ、可愛いなあ

翌日

『To Nobles welcome to the earth
h . To Nobles welcome to the earth
r t h』

「朝か」

さっきのは目覚ましだぞ？決して水没王子が言っているわけではない。

「今日から教師か……実感が無いな。さてと……行くか」

私は自分の部屋に鍵をかけて外に出る。何人が生徒を見かけるがまあ気にしなくても大丈夫だろう。だって管理人なんだから。約一名カメラで写真を撮っているが……

「<コンコン>学園長？入りますよ？」

「おおセロ君か。入ってきてくれ」

学園長室に入るとそこには昨日会ったアスナ姫と木乃香ちゃん。そしてネギ君がいた。しずな先生は私が居るから居ないか。

「この子が？」

「ふむ、ネギ君。彼が君のサポートをしてくれるセロ・ベルリオース君じゃ」

「あつ！ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

「セロ・ベルリオースだ。気軽にセロと呼んでくれ」

「はい、ゼロさん」

ふむ、やはりナギとは違っていい子だ。

「じゃあゼロ君、あとは頼んだぞ？」

「了解した。じゃあ行こうか三人とも」

「」「はい（はあ）」「」

こらっ！アスナ姫！溜息なんぞつくんじゃない。

教室に向かう途中にアスナ姫はネギ君になにやら言っただけで木乃香ちゃんと一緒に先に行った（大分時間が経っている所為で原作知識を少ししか覚えていません）さてと……教室に着いたか。

「ほらネギ君、クラス名簿」

「あ、ありがとうございます。うわ、こんなにいっぱい……」

「……正直私も全員フルネームで呼べる自信は無いな」

「……頑張って覚えます！」

「そうか……若いことは良い事だ。じゃあ私が先に入るよ」

「えっ？でもボクの方が担任ですので……」

ふっ甘いな……君はこの学校の生徒を甘く見ている。

「まあ一応年上だからな。じゃあ行くか」

教室の扉の上には黒板消し。そしてロープ、おもちゃの弓矢、バケツが設置されているようだ。隙間から何となく見える。

「失礼するくパシツ」

「「「「「おあー」」」」」

……ロープを避けて、弓矢を目視で掴み、バケツを金髪幼女に向けて蹴る。もちろん別方向に飛ばされたが……

「へロー、マイネームイズ、ゼロ・ベルリオーズ！ハハハ」

「似非外人ツ！？」

取り敢えず桜咲刹那の前に歩いていき……

「オーウ……ジャパニーズサムライ！」

「えっわ、わたしは」

ふっお前は英語が苦手と言う事は既にお見通しよ！

「オーマイガー！ジャパニーズニンジャ！」

「ん？なんの事でござるか？」

いや、バレバレだろ？そして最後に……

「<ヒヨイ>オーウ！ヨーロッパドル！」

「……トラス・レイレナード、下ろせ、殺すぞ」

最後は金髪幼女。こちらの事は知っていたようだ。

「……まあ冗談はここまでとして」

『冗談！てか日本語上手いじゃん！！』

突っ込みが一斉に来る。さすが天下の3-Aだな。教卓の所まで戻り、生徒を見て自己紹介をする。ネギ君も待っているしな。

「このクラスの副担任になるセロ・ベルリオーズだ。よろしく頼む。ちなみに彼女居ない歴年齢。年齢は内緒。以上」

『ハイ！』

「質問は後で受け付ける。じゃあネギ君、入ってきてくれ」

「あ、ハイ！」

テクテクとネギ君は教卓に歩いてくる。手と足が一緒だ……ある意味凄いな。

私は教卓を離れて窓際に寄る。相沢さよ、まあ幽霊さよちゃんと目

が合ってしまったので一応念話でもして話すか。

『……………相沢さよさんもこれからよろしく』

「えっ！？私の事が見えるんですか！？」

『当たり前だろ？これでも魔法使いだ。まあ他の人には見えていないから念話で話すが』

「ううゝ初めてです……………私と話せる人が居るなんて」

『あそこに居るエヴァンジェリンも多分お前のことが見えるから話しかけてみるといい。それで良いよな、キティ？』

『誰がキティだ！！というか何でお前がその名前を知っている！？』

『だってアルの友達だから』

『アイツか！アイツの所為なのか！！』

端っこの席で何かやっているエヴァは置いていて、どうやらネギ君の質問タイムは終わったみたいで、授業に入っていた。さてと、次の時間は理科か。私も準備をしないといけないな。私は学園長からもらった科学、正確には中学生だから理科なのだが……………の教科書を見て今日の授業のスケジュールを組み立てるのだった。

理科の時間

「皆さん、今日は青酸カリをなめて見ましょう」

『死ぬわっ!』

何という突っ込みでしょうか……これぐらいじゃ貴方達は死なないと思いますが、特に金髪幼女さんは

「じゃあそれは来週にして」

『来週!?!』

「今日はジャガイモにヨウ素液を垂らしてみましよう」

これこそ中学生の科学、これぞ日本の特権!

「せんせー、その実験は一年生の頃やりました」

とメガネをかけた少女、早乙女ハルナが言う。

「そうなのか? ちなみに私は中学生の頃にこの実験で大変興奮してその夜の夜は眠れなかった」

『そんなにつ!?!』

「じゃあ中学生の科学らしく……そうだな、私への質問タイムにし

ようか

『科学関係無いじゃんっ!?!?』

「じゃあ質問ある人？」

『無視かよ!』

「はいっ！」

手前の席に座っている……確か朝倉和美ちゃんだったか？

「えっと朝倉」

「ずばり先生は何処の人ですか？」

「……そうだな、大人の居ない世界かな」

『ネーランド!?!?』

「……先生の年は？」

「内緒って言っただろ？」

「……あっ!?!今は何処に住んでいるんですか!?!」

……ああ、そういえば今日の朝に写真を撮っていたのは朝倉だったな。

「管理人室に住んでいる。女子寮のな。何かあったら直ぐに来ると

いい」

『ええー！！』

そういえば昨日はアスナ姫も木乃香ちゃんも驚いていたな。

「他に質問が無いならこのまま授業に入るぞ」

「ああ！ちよつと待って先生！！」

そんな感じで初めての授業は終わり、教師一日目の仕事は終わった。

四話 学校……良い響きだ（後書き）

と言う訳で主人公の名前は、某天才とランク1の名前を使わせてもらいました。

この名前は今後変わりません。何故この名前になったのかは筆者が好きというのがありますが、他にも色々意味合いが含まれます。まあそれは今後分かる事なので……

さて、皆さん。二月二十四日は何の日でしょう？

そうです、Gジェネワールドの発売日です。

そんな事どうでもいいですね、はい。

では、予告

第五話、アクアビットマン！

退却したアクアビットマンには更なる敵が居た。

それは後頭部が異様に長いぬらりひょんと金髪幼女。

奴らはコジマ技術を盗むべく暗躍を始める。

「クツ！コジマ技術は渡さん！」

「そんな体たらくで私に勝てると思ってるのか！」

「幼女のくせに！」

「幼女言うな！！！」

第五話、コジマと幼女と時々化け物

「化け物じゃ無いわい！」

一部嘘じゃない部分も含まれています。主に化け物の所ですが……

「ひどいっ……」

ではまた来週

五話 テストと魔導書と時々ゴーレム（学園長）（前書き）

遅くなつてしまいました。やはり日常パートは難しいですな。夜雑さん、そして鯖味噌さん。感想ありがとうございます。水没王子は感想があるのと無いのでは執筆速度が大変違いますからありがとうございます。

さて、今回は期末テスト回。早くバトルが書きたい……

今回はグダグダ回です。どうぞ

五話 テストと魔導書と時々ゴーレム(学園長)

『汝、我を取り込んで後悔してないか?』

「ほう……そんな感情も芽生えたか。別に後悔はして無い。あの時お前を取り込んでいなければ私は死んでいた」

『……そうか、ならば良いのだが。だが忘れるな、もし汝が我を裏切ったら我は汝を乗っ取るという事を』

「了解した。眠るのか?」

『ああ……少々疲れた』

「分かった。じゃあな『ライ……いや、シユープリス』」

『ああ……また汝が寝ているときに話す。テストメント』

S i d e
セロ

「朝か……」

久しぶりにアイツから話しかけてきたな。最近は特に静かだったが……

「まあ良いか。もうそろそろテストもあるし、早めに行くか」

管理人室から着替えて出るとアスナ姫がいた。

「ん？神楽坂か、やけに早いな」

「あ、セロ先生。おはようございます。わたし新聞配達バイトをしているので」

「そういえばタカミチからそんな話を聞いたな」

「高畑先生からですか!？」

「うおっ!」

喰い付きが半端無いぞ!例えるならスプリットムーンがしっこくブレードを振ってくるぐらい。

「あ、ああ……それで神楽坂は急がなくていいのか?」

「あっ!?!じゃあ失礼します!」

「頑張つてこい」

「はい!」

本当に表情豊かに育ったな。しかもタカミチに惚れている。

「あいつら結婚すれば良いだろ」

一人苦笑しながら私は職員室に向かった。

職員室

「あっ！トー……セロ先生おはようございます！」

今私の目の前に居るのは瀬流彦という名の狐もとい狐顔の先生だ。

「ああ、おはよう。瀬流彦も早いな」

「はい、さすがにテスト前は早く来ないと裏の仕事もあるので……」
裏とは魔法関係ということだろう。確かに、中等部の魔法先生たちは殆ど来ていた。

「まあ私は裏の仕事は受け持っていないが……そんなに大変か？」

「はい、特に最近図書館島を狙ったのが多くて」

「確かにあそこはいろんな禁書が多くあるからな」

まあアルが居るだけで大丈夫だと思うけど……

「それはそうとセロ先生はどうですか？教師生活。ネギ君は既に慣れてるようですが……」

「馬鹿か？ネギ君が慣れているのに私が慣れてなくてどうする。と言っても彼ほどは生徒と仲良くなれていないと思うがな」

「でも先生は生徒に人気ですよ？この前新しい麻帆良の七不思議にセロ先生の年齢が新たに追加されましたから」

「……七不思議が追加されて良いのか？」

「まあ麻帆良ですから」

……なんとも言えんな。

「さてと……じゃあテストでも作るかね」

「初めてですよね？頑張ってください」

「ああ、ありがとう。さてと第一問。世界に存在するイージス艦の名前を五つ言いなさい」

「ちよっ！先生！それは理科とは関係ないですよ……！」

学園長室

「学園長、何かようか？」

「ふおっふおっふお、すまんのお。わざわざ来てもらって」

「まあ一応、学園トップと一教師の立場だからな」

職員室でテストを使っているとしずな先生から学園長が呼んでいると聞き、私は学園長室にやってきた。今はHRの時間だが、まあネギ君が居るから大丈夫だろう。

「まあ君を呼んだのは他でも無いネギ君の事なんじゃが」

「ネギ君なら教師としてやっていけるとおもうぞ？」

「ふむ、しずな先生もそう言っておった。しかしそれだけでは修行にはならんからの、わしは3・Aの期末を最下位脱出という試験を出した」

「……まあ今のままでは厳しいと思うが、何とかなるだろう」

バカレンジャーと本気を出していない金髪少女とロボットを何とかすれば最下位は脱出できるだろう。

「そこでじゃ、わしはあえて頭の良くなる魔法の本という物が図書館島にあるという情報を流し、成績が低い者を重点的に勉強させようと思うのじゃ」

「……私が監視に？」

「いやいや、監視はアルビレオにしてもらってから大丈夫じゃ。君は残って他の生徒達にテスト勉強をさせてくれるとありがたい」

「アルか……ならば大丈夫だろう。分かった。生徒には怪我の無いように頼むぞ？」

「了解じゃ」

どうやら原作と同じ流れになったようだ。最近はやがど忘れていたが確かこんな事があったと思う。

「では、失礼する」

さてと……ならば明日の為にテスト対策でも作るか。テストはあと少しで作り終わるからな。

翌日

「おはよう」

「せせせせせせ、先生!!」

「どうした、そんなに慌てて」

教室に入ると図書探検部の早乙女が顔を真っ青にしてこちらに寄ってくる。

「ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に!!」

「そのことなら既に図書館島の司書から話を（昨日の夜に念話で）聞いている。彼らは明日に戻るから大丈夫だ」

「へっ?」

「聞こえなかったのか?ネギ君たちは明日か明後日の朝には帰るか

ら大丈夫だ」

「よ、よかった〜」

「よし、全員安心できたな？じゃあテスト対策のプリントを配るぞ」

『ええ〜』

オイ、一応ネギ君の将来がかかっているんだぞ？

「ネギ君の事を思うのだったらちゃんとプリントをしるよ」

「分かりました！この委員長こと雪広あやか、ネギ先生のために修羅となりますわ！」

いや、ならなくても良い……

「あと、適当で良いやとか思っている奴は許さんぞ。参考資料とか使っていていいから八割以上正解しろ」

「げっ！」

適当にしよつとしていた長谷川千雨こと、ちうタンがそんな声を出す。お前一応アイドルなんだから……

「じゃあ始め〜分からない所が合ったら私に聞け」

「はいっ！」

春日美空、お前はもう少し自分で考えろ……

午後 とあるカフェ

授業も終わったので学園内にあるカフェでテストを作っていると、白衣を着た緑色の髪の方が私に向かって歩いてくる。

「頑張っているのであるな、セロ先生」

「あ、西先生。先生もテストを？」

「うむ、高等科のテストは問題数を多くしないといけない、もとい多くして生徒が苦しむ姿を見たいから多くしないといけないのである」

いま話している先生は、西^{にし}博士^{はくし}先生。同じ科学の先生で高等科を担当している。まあ正直に言ったらちよつと、いや完全に向こう岸に逝っちゃっている先生だ。

「おつとそんな事ではなかったのである。学園長が学園長室まで来てくれと言っていたのである」

「学園長が？……分かりました。じゃあ私はこれで」

「うむ、ではまた明日にでも……」

「あの男が裏世界の英雄だなんて信じられないのである……超鈴音が言っていた事だから本当だと思うが……まあそんな事よりエルザを完成させるのである」

またまた学園長室

「おおセロ君、待っておったぞ」

「セロ、遅かったですね」

「……なんでお前が居る、アル」

学園長室に入ると、ふおっふおっふおと某忍者星人のような声を出しながら椅子に座っている学園長とアル（幻影バージョン）が居た。

「いや、彼らの監視をしているのも楽しいんですが、少々暇になりまして」

「暇になったといってもちゃんと見ているんだろ？」

「はい。チキンを食べながら見ています」

「ふおっふおっふお、まあアルビレオに任せておれば危険は無いじやろ。それよりもセロ君、テストは作り終わったかの？他の先生方はまだでワシ暇なんじゃが……」

オイコラ、仕事しろよ学園長……

「まあ先ほど作り終わりましたが……」

「じゃあネギ君達が帰ってくるまでワシと将棋でもしようかの、エヴァは困暮しかしてくれんからの」

「……ネギ君達が帰ってくるのは明日か明後日ですよね？」

「今日はオールナイトじゃ！」

……はあ、ダメだこの妖怪。はやくなんとかしないと

……オイアル、笑ってこっち見てるんじゃねえよ。

「二十四戦二十四敗……じゃと」

「全く、徹夜だけじゃなくてほぼ一日（夕日を二回見た）とか、本気でありえないぞ」

「全くです。私は途中で眠りましたけど」

結局学園長の相手をして二十四時間耐久将棋を行ってしまった。

「もう一回じゃ！もう一回頼む！！」

「いやいや、そろそろネギ君たちが帰ってくるでしょ？」

「あっ」

……おい、なんで冷や汗かいているんだ。絶対にこいつ忘れていた
だろ。

「……よし、これでいいじゃろ。スマンがネギ君たちを迎えに行つてくれんか？」

「アルが行けるだろ？」

「いえ、私はネギ君に今は会いたく無いので」

「ワシはゴーレムの制御があるからの」

……将棋を二十四時間、そしてネギ君達の迎え。明らかに最初からこれが目的だったんじゃないのか？

「……最初からこれが目的だったのか？」

「「さあ？」」

絶対これが目的だ。はぁ面倒だが……ネギ君だけでなく他の生徒たちが居るからな。

「分かった、じゃあ行ってくる。裏のエレベータから降りて螺旋階段で待っていれば良いんだろ？」

「ふむ、その時に魔導書も図書館に戻しておいてくれんかの？」

「……本は返してもらおうから、後はアルが頼む」

「まあ一応司書ですからね。分かりました」

全く……面倒だ。眠いし、だるいし、鎧土竜のえさ替えてないし……

「みんな！急いで乗って乗ってー！」

「おう、お疲れ様」

「あ、どうも……ってセロ先生！！」

エレベータの中で待っていると扉が開き図書館島に行っていたメンバーが走ってくる。最初に着いたアスナ姫が私の姿を見て驚く。そんなに驚く事か？

「みんな怪我は無いか？」

「え、あっさつき綾瀬さんが転んだぐらいで」

「（ピクッ）……他には？」

「えっと（なんか怒ってる？）私が肩を痛めたぐらいです」

「そうか……ネギ君！」

アスナ姫と話している間にエレベータの中に全員乗ったようだ。あとは本を図書館島に返して……

「は、はい！？」

「その本は図書館島に返してくる、というよりそれを持ったままだとエレベータが使えないからな」

『ええーっ!』

「いや、そのぐらいのセキュリティは必要だろ。さてとじゃあネギ君、後は任せたまよ?」

「あつてもこの先にはゴーレムが!」

ああ……私の事を一般人と誤解しているのか。確かに魔法使いとか言っていないからな。

「まあ危険だったら逃げるさ。じゃあまたテストの日にでも」

私は本を持ってエレベータから出る。もちろん一階へのボタンを押して出たので私がエレベータから出た瞬間にネギ君達は地上に向かう。これで私が魔法使いという事はばれないだろう。どんな事をしてても……

「ふおっふおっふお、行ったようじゃの」

「そうですね学園長『来れ(アダアット)』」

「……………のう、その浮いている丸い球体はなんじゃ?」

「あ、これですか?私のアーティファクトの一つであるソルディオスです」

「……………いま必要か?」

「はい、必要です」

ゴーレムもとい学園長はふおっふおっふおと笑いながら後ずさりする。

「おっ！おっ！と教育委員会に書類を出さないといけないんじゃないじゃった。それでは」

「はい、それじゃあ死んでください」

ソルディオスは緑色の輝きを放ちながらゴーレムに目がけてマジマキャノンを放つ。

「ふおおおおおおお！！！！！」

「あれほど怪我をさせるなどといったのに。全く」

ゴーレムは頭が半壊。ついでに螺旋階段の下に落ちていく。

「あれは事故じゃあああああああ！！！」

醜い妖怪の声が聞こえるが気にしない。

「さてと本を元に戻すか」

私は本が置いてあった所に向かうのだった。

教訓、約束は守りましょう。

ちなみに学園長は原作以上の怪我をした。

頭に絆創膏 頭に包帯。腰をキックラセンキ。

もちろんネギ君のクラスは学年一位を取りました。

2-Aで今回一番成績が低かったのは……悲しいことかな、桜咲刹那だった。

「桜咲はバカレンジャー登録だな」

「ちよっ！セロ先生！！」

五話 テストと魔導書と時々ゴーレム(学園長)(後書き)

キックラセンキ 北海道の方言でぎっくり腰。

まあ私は北海道民じゃありませんけど(笑)

さて、期末テスト回はいかがだったでしょうか？

面白くなかっただろ？知ってます。ごめんなさい、文才が欲しい……
しいて言うなら最初の話だけが後々役に立ちます。

あと西博士も……

そしてとうとう本編の始まりです。やっとバトルが書ける！！

そう、これからが水没王子の本気だ！

「まあ文才が無いがな」

うるさい！金髪幼女！ネギ君にボコボコにされる！！

さて、そんな事はどうでも良いでしょうから予告！

第六話、アクアビットマン！

迫り来る吸血鬼と妖怪を何とか防いでいるとそこに颯爽と現れる影。

「エヴァンジェリンさん！ボクが相手です！」

「ふっ坊やに負ける私では無いぞ！手伝え！アクアビットマン！」

「アクアビットマンは正義の味方です！エヴァンジェリンさんの味方はしな」主人公の座は渡さんぞ坊主！！「ええー！」

第六話、アクアビットマンは主人公

「我が恨みと妬みと憎悪を知れ！！」

「こんなの正義の味方じゃないよ！」

嘘です（笑）

ではまた来週^^

六話 吸血鬼従者のセロ先生（前書き）

遅くなってしまって申し訳ありません！

まずは鯖味噌さん、感想ありがとうございます。

ちなみに、某ロリコン探偵や、混沌は出ないと思います（多分）
いや、出したいんですけど、色々と混沌になると思うんで……

ちなみにこの前、テレビでドラ もんがあっていたんですが、ス
夫？の従兄弟の兄さんの声が西博士で吹いてしまいました（笑）

さて、そんな事はともかく第六話です。

題名だけでどんな話か分かりそうですが……

じゃあ、どうぞ！

六話 吸血鬼従者のセロ先生

「デンドデッデデレデンドデッデデレデンドデッデデレデンドデッデデレ」

「『コンコン』セロ・ベルリオーズ、居るか？入るぞ？」

「へーエ エーエエエー、エーエエー ウーウォーオオオー、
ララララ ラアーアーアー！」

「む、いるな。すまないが話をしたいんだが……」

「ナアオオオオ オオオオオ、サウエエエアアアア アアアア
アアアアア アアアアア、イエエエエエエウウアア……」

「おい、聞いているのか！セロ・ベルリオーズ！」

「へーラロロオールノオーノナーアオオオー、アノノアイノノオ
オオオオーヤ、ラロラロロリイラロロー、ラロラロロリイラロ、
ヒーイジヤロラルリーロロロー」

「話を聞け！！！」

「グハッ！」

人が気持ちよく歌っているときに跳び蹴りをいれるなんて事をする
奴は誰だ！

「……なんだキティか」

「その名前で呼ぶな！」

「それで……なんのようだ？血を吸わせろというのは嫌だぞ。とい
うか私の血はコジマ味だからな」

「（コジマ味？）いや、そんな事じゃない。そんな事より大事なこ
とだ」

「……まあ話だけでも聞こうじゃないか」

「助かる」

吸血鬼説明中……

「……ようするにネギ君襲うから見逃してくれ。ノーカウントだ！
って事か？」

「なんだ？そのやられ役みたいな台詞は……まあ簡単に言うならそ
ういうことだ」

「……断る」

「クッ！坊やに「そんな楽しそうな事を見逃すわけはあるまい」は

「？」

「確かキティ」その名で呼ぶな！」「エヴァの従者は茶々丸さんだったか？」

「ああ、一応チャチャゼロもいるが……残念ながら今の私の力じゃ動かすことが出来ん」

……うーん、ネギ君は茶々丸さんを攻撃したくないと思うし……あ、そうだ。

「じゃあ私がエヴァの従者になろう」

「はっ？」

「だから、私がエヴァの従者をすると言っているんだ」

「……さて、お前は紅き翼のトールラス・レイレナード」は既に死んだ」……なのだろう？」

「まあ昔はそう名乗っていたな」

「英雄様が私の従者をするなんて馬鹿げてないか？」

「人殺しが英雄なんて馬鹿げてないか？」

「……まあそうだな」

「結局英雄なんて人殺しだ。はつきり言うとお前も私もナギも一緒だ。ただ人を殺したのが戦争か戦争じゃないかだ」

まあ罪の意識なんて無いが……

「しかし、貴様が私の従者をするなら学園長が許さないだろう？」

「いや、ネギ君の護衛は頼まれても、攻撃してはいけないうって言われてないし、書類上も問題ない」

「人として問題あるがな」

……私を人として数えるのが問題だ。

「しかもだ、私がエヴァの従者するのは四つの利点がある」

「ほう……なんだ？」

「まず一つ、エヴァが楽になる」

「まあそうだな」

「次に、私が楽しい」

「……利点なのか？」

「次に茶々丸さんが攻撃されない、または傷つかない」

「確かに茶々丸が攻撃されたら困るしな」

「最後にネギ君が大変困る」

「最悪だな」

「まあ中悪へまじくらいだ」

最悪はもつとも悪い、そんな悪くないから中悪くらいだろう。

「で、どうだ？まあ私はそんなに手出しはしないから安心しろ」

「……分かった。ただし、坊やに手出しはするなよ？」

「了解、でいつから？」

「ふふ、今日からだ」

Side 佐々木まき絵

「はあ、はあ、はあ」

なんで、何で追いかけてくるの！なんでこんなに早いの！

『がぁー!』

「きゃぁー!」

「こわい、こわいよー!

』食べちゃごぞ〜」

「あ、いや、いや〜ん!」

なんでガチャ ンがー!!

Side セロ

「ふう、これで良いのか?」

「あ、ああ……それで、なんだその服装は」

「ん?ガ ヤピンだけど何か?」

新しい七不思議、桜通りの吸血 チャピン伝説。

「……それよりも分かっているな?」

「ああ、これで明日にネギ君が来るだろうから、明日襲撃するんだ

る？」

「そつだ、じゃあまた明日頼むぞ」

「分かった。ごめんな、佐々木」

翌日

「……エヴァンジェリンの手伝いをしているそつじゃな」

てへっ バレテタゼ

「その顔止めてくれんかの。なんか無性に腹立つのじゃが」

「……それで、私に何かようか？ネギ君には手を出すなとか？」

「いや、別にそこは良いんじゃないが……命だけはとるなとエヴァンジェリンに言っておいてくれんかの？」

「エヴァは女子供の命は取らないから大丈夫だろ？私は無論手加減するから」

「……なら良いのじゃが……もしもの時は頼んだぞ？」

「ああ……じゃあ私はエヴァの所に行くぞ」

「こっちも一応監視しておくからの」

「だって」

「ふん、古狸め！まあ良い。これで学園側からは援護は来ないと分かった」

学園長に言われた事をエヴァに伝えるとあまり嬉しくなさそうだが、利点があるから別に構わないといった結果になった。

「それで……ここで誰かを襲うのか？」

「ああ、多分坊やもここを見張っているだろうからな」

「じゃあ、私は？」

「この地点にいてくれ。もし坊やが思った以上だったらここに行く」

「もし弱かったら？」

「血を吸わせてもらって呪いを解く」

「もちろん殺しは？」

「しない。私の誇りにかけて、な」

「分かった。じゃあ私はここで待っているぞ」

良かった、たぶんネギ君は思った以上だからこっちにくるだろう。
準備しておこう。

S i d e ネギ

まさか！桜通りの犯人がクラスのエヴァンジェリンさんだったなんて！でもボクが止めてみせる。

「ククク、流石だな坊や。でもこちらには」

エヴァンジェリンさんの隣に男性が現れる。もう一人いたなんて、
でも！

「ラス「詠唱なんか使ってるじゃねええええ！」あだっ！」

デ、デコピン！？しかも詠唱が出来ない！？というより貴方は！？

「セロさん！？」

Side セロ

「セロさん!？」

「ハツハツハ、エヴァの従者のバルバ……セロだ」

「そ、そんな」

おーおー、驚いている。まあ副担任の私がエヴァの従者だったら驚くよな。

「実を言つとな、私も悪い魔法使いなんだよ」

「なんで！魔法使いはこの世のために働くのが役目のはずです!!」

「いや、私は一応働いているし？まあこの世の中にはいろんな人間、もとい魔法使いが居るといふことだよ。じゃあすまないけど」

ネギ君を捕まえてエヴァに差し出す。エヴァは「ハア、ハア、ハア」と息を吐きながらネギ君に近寄ってくる。ちよつとエロいな……

「やつとだ、やつと呪いが」

「あんた達なにしてんのよ!!!」

「よっ」と

「はぶっつっ!!」

あらら、エヴァはアスナ姫の王家魔力キックをくらっちゃった。もちろん私は避けたが、

「か、神楽坂明日菜!!」

「おお、神楽坂」

「えっ! ええ!?!? なんでエヴァンジェリンさんとセロ先生が……まさか犯人は二人が!! しかも二人で子供をいじめちゃって! 答えによつては許さないからね!」

あらら、こりゃ不味いな……

「エヴァ」

「分かっている。覚えておけよ! 特に神楽坂、私を足蹴にした事を後悔させてやる」

私はエヴァを小脇に抱えて(エヴァが飛べないので)さつさとエヴァの家に戻る。はあアスナ姫が関わるなんてなあ(原作を覚えていない)ちよつとややこしくなってきたな。

「お、お前もつとマシな抱え方をしろ!」

「無理」

それから三日後

エヴァが魔法を使えないこともあって三日間は何もしないでいた。
ちなみにネギ君には

「学校の時間には何もしないから安心していいよ」

と言っていたから少々緊張しているものの別に仕事には影響しなかった。だが……

「忘れていた。そういえば私はエヴァの従者という設定だったな」

私の後ろにはネギ君とアスナ姫とイタチ？あ、オコジヨか、が隠れながらついてくる。

「はぁ……まあエヴァは賞金首（強い）だから狙わないよな。私は名前を変えているし私を知っている人なんて極少数（と自分は思っている）だろうし……」

面倒だなと思いつつも人通りの少ないところに移動する。

「セロ先生」

「セロさん」

いやあ私は人気者だなあ（笑）……少々躊躇っているようだが、こっちは本気出せない分不利だな。

「ふん、まるでファルス（笑劇）だな。吸血鬼の従者を倒しに来る英雄の陳腐な芝居だ」

ファルス（Phallus）……ギリシャ語で膨らんだもの。

（Farce）……演劇・映画の用語。今回はこっち。

「……スイマセンが……やらせていただきます！契約執行、10秒間！！ネギの従者『神楽坂 明日菜』！！」

ネギ君が呪文を唱え、アスナ姫の身体能力を一時的にあげる。

「ハッ！」

私は出来るだけゆっくりアスナ姫に攻撃するが、避けられる。

「えいつ！」

アスナ姫はデコピンで攻撃、むう……早いな。しかもこちらは攻撃できないといっても過言ではない。

「魔法の射手、連弾・光の11矢！！」

げっ！そうこう考えているうちにネギ君の詠唱が終わっている。やばいな、これは避けられないな。障壁で多少は緩和できるだろうけど（PAは今見せるわけにはいかないし……）こういつときの為に使う台詞は……

「母さん……ボクの……ピアノ……」

いや、母さんって誰だよ！てか、ピアノ弾いたこと無いし（笑）

「ッ！？やっぱり戻れー！」

あれ？

「『ドドドドドドッ！』うひゃーん！？」

という少々気持ち悪い声と共にネギ君は自分の魔法の射手で吹き飛ばぶ。

「……………（汗）」

多分、あの言葉の所為だよな……なんか心が痛む。

「ネギ！？ちよつとネギ！大丈夫！？」

「ア、兄貴ー！なんで矢を戻したりしたんだよー！」

今の内に逃げるか……ホントになんか申し訳ないな……

「……ごめんな、ネギ君」

その日の夜、私は罪悪感の所為で眠ることが出来なかった。

七話に続く。

六話 吸血鬼従者のセロ先生（後書き）

最初のほうにセロが歌っていた？のは熱情の律動という歌です。

さて、とうとうネギ君と敵対？してしまったセロ。

ネギ君はセロとキティ、「キティって言うな」……エヴァのコンビにどう戦っていくのだろうか！？

そしていつの間にか一万人以上の方にこの小説を読んでいたという事実。

このような駄文を読んでいただいて大変ありがとうございます。

文句、ダメだし、トウトウトウ……等の感想でもよろしいので読者の声を聞かせていただければ幸いです。

筆者はフォーアンサーのオペ子に叱られても興奮するような馬鹿なのである程度のS発言は耐えられると思います（氏ねとかは無しで……）

さて、次回予告

マスターネギは敵対する吸血少女とアクアビットマンに挑戦状を叩きつける！

「ボクと一対一で戦ってください！」

「ほう……私と「アクアビットマンさん！」え？」

「ふん、ならば私も本気を出そう！アサルトアーマー……！」

「こんな物を避けるのは簡単です！」

「えっ！？」

「魔法の射手、連弾・光の 矢」好きな数をお入れください。

一億とか（笑）

「ちよつ！今は紙装甲なんだけど！！ギャー！！」

「よ、弱い……」

「魔力の無い私より弱いぞこいつ……」

マスターネギにボコボコにされるアクアビットマン。しかしアクアビットマンの魂はこんなものじゃ挫けない！

負けるなアクアビットマン、君の時代はまだ終わっていない！！

第七話、紙装甲、されどゴジマは、魅力的
アクアビットマン心の俳句（川柳だろ）

では、また来週！

七話 粗製とは私の事か（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

筆者はまだ生きています。残念だったな！！

さて、七話目です。まあ私としては次の話が本気ですから、あまり期待せずに見てください。

七話 粗製とは私の事か

「胃が痛い」

ネギ君と戦って二日目の朝。まだ胃の痛みがなくならない。しかも昨日ネギ君は寮を出て行ったらしいので更に痛み倍増である……

「……ネギ君大丈夫かな」

私はそんな不安を抱きながら学校へ向かう。はぁ辛い……休みたい。

「……おはようございます」

「あ、セロ先生。聞きましたよ！ネギ君と」

「情報早いな」

職員室に入ると狐という名の瀬流彦が話しかけてきた。あ、逆か？

「まあ殆どの魔法先生は知っていますよ」

「……ガンドルフィーニも？」

「はい、まあ学園長先生が言いくるめたので大丈夫だと思いますけど」

「それは良かった。ネギ君は大丈夫かな？それが心配で胃からコジマが逆流しそうだ」

「コジマ？まあ多分大丈夫だと思いますよ。朝来る時に見かけましたけど笑顔でしたから」

「笑顔？……何があつたんだ？」

昨日寮を出たあとに何かあつたんだろうな……ふむ、胃の痛みが治まってきた。

「おはようございます！ー！セロさん」

「やあ……おはようネギ君」

さっき治まったと言っただな。ありや嘘だ。逆に笑顔なのが怖い。

「セロさん、これを受け取ってください」

『果たし状』

「な、何っ！？普通エヴァに出すものだろ」

「あ、エヴァンジェリンさんのはもう一つあります」

用意周到だな。

「はぁ……どうしようか。まあエヴァが何とかしてくれると思うが……まさか私にまで果たし状を持つてくるとは」

しかも相手にはアスナ姫まで居る（と思われる）彼女を傷つけたら絶対にダンディ高畑が襲ってくるに違いない。

「全く……どうしようかな」

「ゼロ先生」

「うーん……いつその事エヴァにコジマキャノンを撃って『私はスパイだったのだ』とか言ってみるか？」

「……ゼロ先生」

「ん？げえ！茶々丸！？」

な、何故ここに茶々丸さんが！？ヤ、ヤバイ……本物の従者に聞かれてしまった。畏だ！孔明の畏だ！！粉 バナナ！！

「……ゼロ先生はここで何をなさっているのですか？」

あ、大丈夫か？実はあとでエヴァに報告するつもりでは……

「いや、ちょっと考え事を……それよりそれは一体？」

茶々丸は何処かの薬を持っていた。そして向かっているのはエヴァの家。

「エヴァが風邪か？」

出席してなかったからサボりかと思っていたがどうやら風邪だったらしいな。

「はい、風邪と花粉症を患っています」

「そうか……じゃあ私もお見舞いにも行きますかな。打ち合わせもあるし……」

「マスターも喜ばれると思います」

「エヴァが？それは無いと思うが……」

『貴様！私の夢を！！』

『じめんなさーい！！』

「良かった、マスターが元気そうです」

「いや、元気そうだが……喜べる状況じゃないぞ」

エヴァのログハウスに着くとどうやら中でエヴァとネギ君が暴れているようだ。

「まあ取り敢えず止めないと『スイマセンでしたー！！』グハツ！」

「あっ！」

物凄い勢いで出て行ったネギ君が開けたドアにぶつかり私は近くに
あった木にぶつかるまで飛ばされる。もちろんネギ君はそのまま寮
の方に帰っていった。

「……その、大丈夫か？」

「そういう前に何か冷やすものを持ってきてくれ」

「あ、ああ……茶々丸」

「はい、分かりました」

「取り敢えず中に入ったらどうだ？」

「そうさせてもらおう」

……今日は厄日だ。

「で、吸血鬼のお前が風邪なんてなるものなのか？」

「貴様は木に頭をぶつけて無傷なのか？」

「コイツがなければ死んでいたな」

私は胸のポケットから手帳を

「そんなもので防げるか！！」

「なん……だと……」

「そこで驚くほづがどうかしているぞ！？」

よくアニメとかだったら銃弾を防いだり、ナイフを防いだりと有名なのに……

「まあ実際の所は障壁を張っただけだ」

「最初からそう言え……それで、お前がなんのようだ？」

「いや、ネギ君を本格的に攻撃するのはいつかな〜止めないかな〜なんて思ったり思わなかったりしている訳だ」

「明日だ」

「はやっ！ー！」

予想外です。まことに予想外です……

「なんで明日なんだ？」

「明日は麻帆良の全域が停電する。その時に私の魔力を抑えている結界がなくなるらしい。だから明日決行する」

「……はあ分かったよ。じゃあ明日の夜にまた会おう」

「ほう……随分と聞き訳がいいな。何かあるのか？」

「まあ約束だったというのもあるが、それよりも結界がなくなると何か起きそうだな……お前達の近くに居たほうが何かあった時に何とかなるだろ」

「……勘か？」

「勘だ。じゃあ明日な」

全く……結界がなくなるとかついてねえ、ついてねえよ……

大停電の日、夜

『カッカッカッカチッ』

『マスター、ハッキング完了です。これでマスターの魔力は元通りです』

「だ、そうだぞ。ゼロ」

「全く……魔力が戻った瞬間に大人の姿になるな。心臓に悪い」

「ふっ、なんだ？私の美貌にビックリしたのか？」

「……馬鹿か？」

「馬鹿とはなんだ！馬鹿とは！！」

「まあ良い、行くぞ」

「こらっ！私がマスターだぞ」

はい、皆さん、今私は大浴場に居ます。これって教師としてダメじゃないんですかね？まあ良いですけど……

「エヴァンジェリンさん！ゼロさん！！まき絵さんたちを放して下さい……」

「おい、エヴァ……いつの間にこんな事したんだ？」

「貴様がなにやら考えている時だ。さて坊や、血を貰おうか」

エヴァがそう言うとネギ君が（。　。　）ポカーン…といった感じになる。どうしたんだ？

「だ、だれですか！？」

「わ、私だ！わたしー！！」

「ク、ククク」

「笑うな！！」

エヴァは元の姿になってネギ君に自分だというのをアピールする。これは笑える。

「ええい！今日という興は「遅かったじゃないか」いきなりなんだ！？」

「え、いや、何か言わないといけないような気がしたんだ」

「なんだそれは、まあいい。今日は血を頂くぞ坊や」

「分かりました。でもそうはさせませんよ。今日は僕が勝って悪い事を止めてもらいます」

「ふふっそれはどうかな？」

エヴァが『パチン』と指を鳴らすとまき絵さんたち四人がネギ君に歩み寄っていく。

「ひ、卑怯ですよ！」

「卑怯？ふ、言っただろ。私たちは悪い魔法使いだって」

「あれ？私も入っているのか？」

「じゃあ坊や、楽しませてくれよ」

おゝい、無視ですか？

「はっはっは、やるじゃないか坊や」

「あの〜エヴァさん。暇なんです」

『マスター、時間に注意してください』

「分かっている。じゃあ行こうか」

こゝ、この台詞は……！

「ハイ、そのつもりです」

「何を言っているんだ？」

ぐすん

「こおる大地!！」

「うひゃあ!！」

只今絶賛エヴァ無双発売中です。税込二万七千円、今ならゴスロリエヴァ人形もついてくる。

「ふっ学園から出られないと知ってこの場所か。以外にせこいじゃないか。先生」

あっ!

「エヴァ、そこには」

大事な事を言うのを忘れていた。そこには

「な、なんだこれは!？」

捕縛結界があるから気をつけろって……遅かったです。はい。一応、言っておくか。

「捕縛結界があるから気をつけろ」

「遅いわ!！」

「わーい ひっかかりましたねエヴァンジェリンさん。さあ悪い事

「はいはい」

どうやらお姫様のお到着のようだ。全く……さっさとネギ君の所に行って……

「カモ！」

「合点姉さん！オコジヨフラッシュュー！」

何もしないからって！！

「眼が！眼があああ！AMSから光が逆流してる！！」
痛いです！とても眼が痛いです！！

「あぷろぱあああああ！！」

どうやらエヴァはアスナ姫に蹴られたようだ。

「クソツ！何処だ！！セロ、何をやっている！」

「すまん、あの光は予想外だった」

『契約更新！』

「クツ！そこか！？」

「エヴァちゃん、セロ先生、これで二対二よ」

「ほう……まあ良い。セロ、私は坊やの方をやる。神楽坂を頼むぞ。」

気をつけるよ、奴は未知数だ」

「分かった」

多分魔法無力化のことを言っているんだろうな。

「じゃあ神楽坂、行くぞ」

「え、あ」

「先生チョップ!!」

「ちよつ危ない!!この」

あ、デコピンが……

「『バチンツ!』イッタア!!」

「あ、当たった」

「こんな不良少女に育てた覚えは無いぞ!？」

「育てられた覚えも無いわよ!!」

デコが痛い……ん？

「チツ!クソ、アスナ!ネギを頼む!!」

「え!？」

「やりおつたな、小僧。さすが奴の息子」どけ、エヴァ「な、何を
!?!」

『ドゴンッ!?!』

『奴』の拳と私、いや俺の拳がぶつかる。

「全く……嫌な予感は当たるものだな」

「な、何が……」

「ネギ、アレは何よ!?!」

「……あ、あれは……悪魔？」

漆黒の翼に捻れ曲がった角。見た目は初老のおっさん。しかし力は
少なくとも今のネギ君以上。

「まさか、ネギ君を狙いにか？」

「ふふふ、まさか私は女子の肉しかいらん。その吸血鬼はすぐに再
生するらしいじゃないか。ふふふ、まさに私向きだ」

「下種が。エヴァ、もうそろそろ結界が元通りになるはずだ。橋の
方向向かえ」

「……クッ!分かった」

「逃がすとても？」

「それはこっちの台詞だな。俺から逃げられるとでも思っているのか？」

悪魔がエヴァを狙いに行くが、俺が先回りをする。

「さて、殺し合いを始めようか」

この時の俺の顔は、笑っていただろう。

七話 粗製とは私の事か（後書き）

この度は更新が遅れて申し訳ありません。
どうやら我が家が真打劔冑、真改に襲われたようで……

くるわくるくるくるいくる　くれはくれくれくれくれは　びゃっか
らんたんしゃんかーらー！！

曲輪来々包囲狂　暮葉紅々劔々刃　白花爛丹燦禍羅！！

分からない人は装甲悪鬼村正で検索を……

まあそんなわけで、スイマセンでしたああ　o r z

こんな状態の筆者でよければこれからもよろしくお願いします。

では次回予告

第八話　正義の味方アクアビットマン！

「貴公には分かるか！少女の柔肌が！！」

「コジマこそ我が命！コジマほどの中毒性が他にあるまい！！」

「尻じゃ！尻が一番じゃ！！」

「な、なんだこのカオスは……」

「ネギ、聞いてちゃダメよ」

「え、え！？」

第八話！君は柔肌が好きか？尻が好きか？俺はコジマ一筋だ。アン
ジエ！俺を斬ってくれ！！

では、また今度！

八話 橋の上の決闘（前書き）

まだまだ行けるぜ！メルツエエエル！！！！

「再起動だと！そんな事がありえるのか！？」

今日の水没王子は一味違うぜ！

文字間違っている所があるかもしれないけど……

面白くないかもしれないけど……

（筆者が）感想待ってるかもしれないけど……

じゃあ八話目です。どうぞ

八話 橋の上の決闘

「さて、殺し合いを始めようか」

俺はその言葉と同時に悪魔野郎の周りにコジマミサイルを大量展開する。

「貴様！！」

「久しぶりのミサイルカーニバルだ。喰らっとけ！！」

悪魔は急いで障壁を張って防御するが、コジマミサイルは全ての障壁をかき消し、次々と着弾、衝撃、爆発。を繰り返す。

「……………さすが悪魔だな！」

コジマ粒子の濃度が濃い煙幕の中から悪魔が出てきて俺に向かって拳をふるう。

「ちっ外したか。まさか貴様が生きているとは、化け物トールラス・レイレナード」

「化け物のお前に言われたくないな。吹き飛ばせ！！」

コジマ粒子をすぐさま集束、発射。コジマで出来たレーザー、所謂コジマキャノンだ。アサルトキャノンはもう少し規模がデカイ。今撃ったのは魔法の射手ほどの太さだ。一発一発がおかしいほどの威力だが…………一発のコジマキャノンは一発が二発に、二発が四発にといった感じに増えていく。

「クツ！貴様の方が化け物だ！！悪魔パンチ！」

悪魔は拳の衝撃でコジマキャノンを次々かき消す。コイツはどうやら公爵クラスらしい。

「これをかき消す貴様も十分化け物……ああ悪魔だったな。ほらどんどんくれてやる。残さず食べるよ？」

コジマキャノンにコジマミサイルのカーニバル。空一面が緑に染まる。それに反射する川も同様に緑色。この世は既にコジマ色！！

「貴様、グハッ！」

「とうとう着弾したか……何ッ!？」

着弾した奴の身体が霧状になって消える。そして次の瞬間、

「油断したな、さよならだ。化け物」

悪魔の手が俺の胸に突き刺さる。

「いやあああ！！」

「そ、そんな」

ネギ君達の悲鳴などが聞こえるが（エヴァはずっと俺を見ているが）俺は笑いが止まらない……

「何を笑って……まさか!？」

「貴様が出るのだろうか？」

俺の身体から緑色の粒子が発生、そして俺という存在の消滅、そして再生。

「俺に出来ない訳ないだろ？本気でやってやる。来れ（アデアット）」

『』

周りの景色が少し歪む。そして俺の空間が完成する。後は自分のやりたい事をするだけだ。

「アーティファクト……未知数の顔を持つ兵器」

ジャック・ラカンの千の顔を持つ英雄と似ているようで、それよりも危険なアーティファクト。

「何も起きないでは無いか！ハッハッハ……貴様のアーティファクトは『ミカ』」

「さて、始めようか。行け！ソルディオス！」

先ほどまで何もなかった空間から十機のソルディオス。

「まさか、空間を操るのか……！」

「お、気付いたか。徐々に空間が変わっている事を……じゃあ」

空間が歪み、周りに大量のビルのような砲台。そして自分と奴が戦う決闘場。

そう、この空間は俺の戦域俺フィールドが負ける可能性はゼロだ。

「BIG・BOXへようこそ、歓迎しよう、盛大になー!!」

周りに現れた大量の砲台。全てがコジマ兵器で出来ている。ソルデイオスからのコジマキャノン、BIG・BOXからのコジマキャノン。そして俺の放つコジマミサイルとコジマキャノン、アサルトキヤノン。

「……化け物が!!」

「最高の褒め言葉だ。次々行くぞ?」

もはや避ける事の出来ない弾幕。一方的な蹂躪。秩序の崩壊。俺のアーティファクトにふさわしい言葉だ。

着弾、着弾、衝撃、爆風、着弾、衝撃、断末魔。

「これこそ我が戦場、これこそ我の存在。これこそ我が力!力こそ正義!!力を持たない意志など不要。戦場に散った者たちと同じく土塊と還れ」

「貴様ああああああああ!!」

腕がもげてコジマ粒子の効果の所為で再生できないその身体でなお俺に向かってくる悪魔。そう、そうでなければ面白くない。

「ハハハ!来いよ、最後まで踊って見せろ!!」

両手にコジマブレードを持ち、悪魔を斬る。腕を斬る足を斬る腰を斬る。その存在を否定し続ける。

「まだまだ！貴様に一撃入れるまで死んでも死にきれん！！」

「ならば来い！抗って見せる！」

コジマで回復が出来ない腕を最後の力で何とか修復した悪魔が拳を振るう。

「トールラス・レイレナード、死ねえええ！！」

「ハハハハ！残念だ、これでチェックだ」

拳を俺に当てる前に、敵は死んでいる。既に生き残る道は無い。大量のコジマで出来た剣が悪魔を包む。その数は十本二十本ではない。ただ、敵を殺すために創る刃。装飾も何もない剣。それが空を埋め尽くすほどに……

「チェックメイトだ」

悪魔の顔に、目に、腹に、コジマで出来た剣が次々刺さる。剣が刺さった所になお刺さる。刺さりきれない剣は刺さっている剣の上から刺さる。

「『翡翠色の剣刃牢獄』悪魔のお前には最高の技だろ？」

「！」

「無窮の空に還れよ。おっさん」

全ての剣が爆発、そして悪魔という存在の消滅。

「フフ……フフフ……アハハハハハ！」

エヴァ Side

アイツは始め会った時から何かが違うと思っていた。冷徹な眼、何を考えているか分からない。ナギとは逆方向に育ったような感じだった。

「フフ……フフフ……アハハハハハ！」

「英雄か」

「えっ？」

おっと……坊やが聞いてしまうところだった。これは内緒だったな。しかし……これでは全く……言っでは悪いが……誰が人間じゃないか判らないじゃないか。

「全く……面白い奴だよ。トールス、いやゼロ・ベルリオーズ」

ナギよりも、坊やよりも、お前の心の中が知りたくなってきたよ。

ネギSide

「フフ……フフフ……アハハハハハ！」

「英雄か」

「えっ？」

英雄？どういうことだ？セロ先生が？そんな事……だって今の彼は

……

「人間じゃ」

「坊や、それ以上言ったら私は貴様を殺さなければならぬ。奴は私を守るために戦った。そんな奴を侮辱するのは許さない」

そうだった、セロ先生はエヴァンジェリンさんを守るために戦ったんだ。そうに決まっている。そして戦った悪魔……悪魔、ミンナヲイシニシタ……ダメだ。今はそんな事を考えては……

「あ、そういえばエヴァンジェリンさんとの戦いは……」

「延期「エヴァの負けだな」セロ！？」

ゼロSide

「エヴァの負けだな」

「ゼロ!？」

「神楽坂は気絶（もとい私が眠らせた）しているようだな」

「あ、本当だ!!」

「そんな事より私が負けというのはどういことだ!!」

裸のエヴァが俺に言い寄ってくる。何というか……眼に毒だ。取り敢えず私が愛用しているコートを着せる。

「そんな姿にされたんだ。おとなしく負けを認めろ」

「むう……」

何がむうだよ……全く。それとこれ以上ネギ君たちと戦うのはゴメンだ。これ以上戦ったらシュープリスが出てきてしまう。

「取り敢えず、ネギ君、君の勝ちだ。それとエヴァ、お前の呪いは私が何とかする。安心しろ」

「えっ?」

そんなキョトンとした顔でこっちを見るな。ちょっと可愛いと思っ

てしまった私は リコンではない……と思う。

「まあ何とかなるから修学旅行には行かせてやる」

「なっ！そそ、そんなものどうでも良いわ！！（ノノノ」

あーやっぱり行きたいようだな。

「という事でネギ君。エヴァは今後はちゃんと授業にも出すから安心してくれ」

「は、はい。分かりました。えへへ、それじゃあボクの名簿にボクが勝ったって書いておこう」

「な、き、貴様！止めるー！！」

「あ、そう言えば……セロさん」

「ん？」

「その……エヴァンジェリンさんや僕たちを悪魔から救ってくれてありがとうございます」

「いや、別に先生として当たり前の事をしただけだ。エヴァは友人でもあるしな」

「それじゃあ、ボクはアスナさんを寮に連れて行かないといけないので……これで」

シユタツと手を上げてネギ君は寮の方に帰っていく。

「じゃあ私も帰る。全く、余計な事を言って……」

「呪いは何とかする。だから許してくれ」

「ふん、じゃあな」

「コートはいつでも良いからな」

エヴァはこっちを見ずにフラフラと手を振って答える。

「ふう、予想外の出来事はあったが……これで何とかなったかな」

私はこの辺り一帯を再び調べて寮に還るのだった。

????? Side

貴様が戦いに酔いしれるほど我は力をつける。

貴様が戦う理由を忘れたその時……

我は貴様を殺して、貴様を乗っ取る事を忘れるな……

八話 橋の上の決闘（後書き）

ヒヤッハー！最高にハイって奴だ！！

深夜なので水没はテンションがおかしいです（笑）

そんなこんなでエヴァンジェリン編は終了。

いかがだったでしょうか？

つまらない？駄文？粗製？

……知ってるよ！！

さて、次回予告の前に七話次回予告の補足……

「尻じゃ！尻が一番じゃ！！」 学園長

名前を言っではいけない例のあの入

「手こずっているようだ。尻を貸そう」

「ギャー！！」

こんな事があっていたのでエヴァが、カオスだと言っていたんです。
十分前の状況でカオスでしたけど（笑）

さてでは次回予告

第九話 正義の味方、アクアビットマン！

とうとう始まる修学旅行、行き先はハイパーボリア大陸

そこは絶対零度の大陸。さあみんな！死なないように気をつけよう。

「そんな訳あるか！京都だろ」

「マスター、そんなにワクワクしてらっしゃるのですか？」

「だまれ！この巻いてやる」

「ああ、ダメです。そんなに巻いては……」

第九話 みんな一緒にハイパーボリア・ゼロドライブ！

「余は飢えたり！」

「だからちがーうー！」

ではまた今度^^

九話 みんな一緒にハイパーボリア・ゼロドライブ（前書き）

やあ……みんなの友達、水没王子だ。

今回は比較的早く投稿……え？遅い？
スイマセン、粗製リンクスなもので……

（^q^）あうあうあー様、感想ありがとうございます。

コジマ美味しいか……もつと喰らえ！！そしてフロム廃人となれ！！

ちなみに水没王子は感想に変身もとい返信があることをはじめて知
りまして……

今後はそれで返信していきたいと思います。

では九話目です。どうぞ！！

九話 みんな一緒にハイパーボリア・ゼロドライブ

「知っているかい？もうそろそろ修学旅行なんだよ。ネギ君」

「はい、ボクとっても楽しみで、しかも父さんの手がかかりがあるかもしれない」

「ハイパーボリア大陸」

「に行けるなんて……あれ？何か言いましたか？」

「ああ、今年の修学旅行は京都・奈良は中止でハイパーボリア大陸に」

「ええ！？？」

「よし、みんな一緒にハイパーボリア・ゼロドライブだ！！」

『オオー！！！！』

「え、み、みなさん。そんな大陸ありませんよー！！」

「と聞いた夢を見た」

「アホかお前？」

とある学園内にあるオープンカフェで私は珈琲、エヴァはカフェオレを飲む。ちなみに

『カフェオレとか……ぶっ』

と言ったら殺されかけたので今後は注意しよう。

「それで……今日行っのか？」

「ああ、修学旅行までにしないと間に合わないだろ？せっかく楽しみにしているんだし」

「うるさい！！（／＼／＼）」

「まあその呪いを正しいものに書き換えるわけだから、修学旅行中は魔法も何も使えないがな。それでも今年で学校を卒業できるのは良いだろ？」

「ああ、さすがにもう諦めていたが、助かったよ」

「どういたしました……ん？あれは」

こちらに歩いてくる男女。私を見つけると近くに寄ってくる。

「ネギ君かと思ったら大間違い！貴方の街のマッドサイエンティスト、ドクター！ウエエエエスト……！」

「博士、うるさいロボ」

西先生と緑色の髪の少女。というかいつも以上にテンションが高いな。

「西先生か。その子は？」

「良くぞ聞いてくれた！さすがセロ先生である。他の無能たちとは目の付け所が違うのである。他の先生方は我輩を変なものを見るような目で見て……そんな眼で見るな！なのである。でもそんな事で少し落ち込む我輩に……萌え」

「やばい、いつも以上だな」

「貴様は博士が言っていたセロかロボ？案外普通ロボ」

どんな話を聞かせたんだ。それよりもこの少女は語尾が変じゃないか？

「オイ、コイツはなんだ？」

「ああ……彼は西博士先生にしひんし、高等部の教師だ。まあ今日はいつも以上に稼動しているが……」

「我輩の求めた答え、それは大十字九朗を倒す事！！そう、それが真理！例え邪神にどんなに邪魔をされそうになっても我輩は何度も何度も立ち上がる。人間には何故足があるか！それは立ち上がるためである！そう、立ち上がった人間は次に地面を掘る事を考えた。そして、そして、とうとうそれはドリルという最高の道具を作り出し人間は今日も地球を掘り続ける！さあ立ち上がるのである、スー

パーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜アウストラロピテクスの咆哮〜人間は更なる進化をとげマントルをも支配してしまうであろう!!!」

「博士戻ってくるロボ!!!」

少女の拳が西先生の鳩尾に炸裂する。

「ガハッ!!!はっ!!!ここは一体……」

どうやら戻ってきたようだ。まあ直ぐにまた何処かに（向こう岸）に行くと思うが……

「それで、先生……その子は？」

「そうそう、そうであった。これは人造人間エルザである!!!どうだ我輩の最高傑作。とうとう我輩は神にしか出来ない事をしてしまった。我輩は何と恐ろしい事を」

「でも茶々丸もロボットだよな？」

「はい、マスターの言うとおりです」

あ、茶々丸さんも居たんですね。

「それじゃあエルザのお姉さんロボか？」

……あ、西先生が止まった。

「我輩のほかに……人造人間を……我輩が最初じゃない……」

何か目の光がなくなつたぞ。

「で、でもでも我輩のエルザは科学と魔術の融合によって動いているから」

「私も科学と魔力によって動いています」

……あ、死んだ。

「う、うう……うわあああん！こつなつたら我輩は巨大ロボットを造るのである！！」

「ま、待て！そんなもの置く場所無いぞ西先生！？」

何処かに行つてしまった。まあ何とかなるだろ。

「じゃあ私は帰るとするか。エヴァ、今日の夜に会おう」

「ああ……よろしく頼む」

「あ、西先生？少々頼みたいことが……はい、貴方の技術が借りたくて……あ、はい。では今から言うものを……」

東名高速道路

「おい……セロ、これはどういうことだ？」

「いや、お前はまだ分からないのか？」

「只今、エヴァと京都に行っております。」

「……修学旅行は明日だぞ？」

「だって、お前が新幹線で行くと関西呪術協会の刺客が知ったら、賞金稼ぎとか来るかもしれないじゃないか」

「私の賞金は既に取り消されている」

「それでもエヴァを狙う奴は居るからな。この前の悪魔みたいな奴とか……」

エヴァは少し考えて納得する。しかし

「まあそれはそれでいいでしょう。私が居る事で他の奴らに迷惑がかかるからな。じゃあもう一つだ、何故こんな乗り物で行く？」

「それは西先生に作ってもらったから……お、富士山だぞ」

「おお！久しぶりに見たぞ……ってそんな事は聞いてない！！何故わざわざバイクで京都に向かう！？それとその速度メーターは何だ！！考えられない速度が書いてあるぞ！！」

確かに最高速度は四桁だ。

「えっと……確か西先生曰く『これぞ魔術と科学の最高傑作である！！』とか言っていたな。この前会った時から無理して作らせたから今頃寝込んでいるけど……ちなみに名前はフラジールだ」

「壊れやすい！？なんだその名前は！！」

「まあまあ……取り敢えず詠春の屋敷に向かうから。それから一泊してネギ君達に合流する。OK？」

「……はあ、貴様に何を言っても無駄か。まあ私も子供じゃないかな。それで納得してやる」

「それじゃあさっさと行きますか。フラジール、フルスロットル！！」

「ちよっ！おまっ！？」

その日、高速道路で謎の物体が高速で移動しているところが目撃されたらしい。

詠春邸

「ふう、やっと着いた」

「……あはは、綺麗な花」

エヴァが何処かに行ってしまったているが……何故だ？

「おい、エヴァ！戻って来い」

「はっ！……こ、こっちは！？」

「詠春の家だ。もう直ぐ来ると思うが……」

「トース！！」

噂をすればなんとやら……前からは歳をとった詠春が刀を持ってこ
つちに……刀？

「死ね！！！」

「うおっ！？」

こいつ本気で振ってきたぞ！！

「ちっ流石に避けるか……ならば！真・雷光剣！！！」

「おまつ！本気かよ！！！」

広範囲技とかもはやギャグとしか言いようが無いぞ！！

「貴方が生きているなんて……不覚でした」

「普通は喜ぶだろうが！！！」

「く、木乃香にあんな本を読み聞かせするんじゃないありませんでした
！」

「あれ？どういうこと！？私は何もして無いぞ！！！」

「こつちの話です！！！」

「だから刀を振るな！！そしてちゃんと説明しろ！！！」

「はあ、はあ、はあ」

「はあ、はあ、はあ」

「……お前ら馬鹿だろ？」

「「コイツの方だ!!」」

……全く、何故斬られなければいけないんだ。

「……まあ良いでしょう。エヴァンジェリンも疲れたでしょう」

「ああ、とてもな」

「トールラス、逃げる事は許しませんよ。取り敢えず座敷で話しましょう」

取り敢えずってなんだよ……

座敷に上がると巫女さんたちが茶菓子やお茶を持ってきてくれた。俺の分はコーヒー。それを飲みながらまずは話を聞こう。

「さて……なんでいきなり斬りかかったか教えてもらおうか？詠春」

「……はあ、これは木乃香が小学一年生の時です」

『な〜な〜、お父さん、いつもの本を読んで〜』

『良いですよ木乃香、えつと……トールラス・レイレナード物語』

『ウチな〜大きくなったらトールラス様のお嫁さんになる〜』

『そ、それは……（まあもう居ないし）まあ大きくなっても覚えていたら、それも良いかも知れませんかね』

『えへへ〜』

「と云う事です」

「すまん、全然分からん」

「そもそもその本は何だ？」

「トールラス・レイレナード物語、著者はアルとラカンで貴方の事を書いているのです。とても美化されて」

そんな話は一度も聞いたこと無いぞ？

「ちなみに印税は一割がいろんな支援団体、三割がアル、四割がラカン、後は出版社です」

ラカンが取りすぎだろ。というより出版社は大丈夫なのか？

「魔法世界では子供の絵本版と全八部の小説があつて、どちらもベストセラーです」

「……そんな物があるのか。ちなみにその小説内の私はどんな感じなんだ？」

「えっと……まず出生は亡国の王子です」

「うわっ！？全然原型が止まっていないぞ！！」

「だから言ったでしょ？とても美化されていると……それで旅に出た目的は確か……ああそうだ、自分の父親を悪い魔法使いに石にされたからそれを元に戻すために旅に出る。でしたね」

何そのファンタジー……

「それで、やはり旅の仲間が居るんだろ？」

もう聞かなくても良いぞエヴァ……

「はい、まずは自分の国の酒場に居た魔法使いナギ」

酒場に何かしらの重要キャラが居るっていうのはファンタジーの本だよな。

「次にさすらいの剣使い、エイシュン」

「何か変な名前だな」

「私の名前だ！私の！！それで国境沿いの教会に居た心優しい神父アル」

オイ、そいつは全然違うだろ。というより奴だったら心優しい神父（笑）になるだろ。

「えっと……ナギの師匠、ゼクト」

あ、そこは普通なんだな。

「探偵のガトウ、タカミチ。この二人は中盤で仲間になります」

RPGだと途中で仲間になる奴ってレベルが低くて困るんだよね。最近はそんな事少ないけど……

「そして最後に南国最強の天才剣闘士、ラカン」

やっぱりお前はそんなキャラなんだな。

「魔法世界では一家に一冊ずつはあるという話です」

「なにそれ怖い」

「まあそんな感じで、貴方を斬る事にします」

「さて、何故そうなるのか分からん」

「分からない？このまま行けば木乃香が貴方の嫁に！！」

「ならねーよ！普通一年生の頃の話って覚えていないだろ！？」

……なんで詠春はそんな苦しそうな顔をしているんですか？

「それが……麻帆良に行く時にそのまま本も持って行ってしまったって……今でも愛読書だそうです」

「……でもでも（あれ？なんか西先生も一緒のような事を）もう中学三年生なんだから」

「……それが……たまに来る手紙に……『ウチが付き合っただったらトーラスのような人がええわ』とか書いてあるんです……本当の貴方を知らずに……（ギリッ）」

「ちよっ！口から血が出てる！？詠春、落ち着け！！」

怖い！怖いぞ詠春！！例えるならヴァオーにブレードで挑んだら、普段使わないとっつきで攻撃されたぐらい怖い！！

「……やはり……斬る……か？」

「お、落ち着け!!！」

「近衛詠春、私は疲れたからもう寝るぞ。そいつは別にどうしよう
と構わん」

「そうですか、じゃあそちらの巫女の方が案内するので……では」

「なあ……なんで刀を抜いているの？」

「消えろ、イレギュラー！」

「ちよつと！詠春！？それleos・クラインの台詞!!！」

「全く……あいつらは馬鹿か」

ちなみに日付がかわるまでナインブレイカー・詠春は私を襲ってきた。

もう嫌だ……修学旅行なんて来るんじゃない……

九話 みんな一緒にハイパーボリア・ゼロドライブ（後書き）

いかがでしたか？

ナインボールに泣かされたのは私だけでは無いと……

さて、今回はそんなに語ることは無いので

次回予告！

第十話 正義の味方、アクアビットマン！

京都に修学旅行に来た麻帆良の生徒達、それを狙う影。

「新入り……アンタは何でウチらの味方をするんや？」

「彼らは……直ぐにエネルギー兵器に頼るんです」

「はっ？」

「確かにエネルギー兵器は強い、ですが……実弾が戦いを熱くする。そう思いませんか？」

「な、何が言いたいんや？」

「強いキャラはほとんどがエネルギー兵器。」

しかしフロム信者ならあえて実弾を使うべきでしょう。あ、両手マシンガンは邪道ですよ」

「あかん、他の世界に行つとるで」

第十話 フェイトは実弾派、俺はコジマオンリー

では、また続きで^^

直ぐに編集^^

とある新型の神狩喰さん、し指摘ありがとうございます^^

十話 スシーテンプーラ、ハラキリー、ハラショー!! (前書き)

水没王子です。

まずは評価、お気に入り登録をしてくださった皆様。

まことにありがとうございます。

総合評価210、お気に入り登録63……

変態共が!!

サーセン(笑)

今後もよろしくお願いします。

では十話目です。どうぞ(駄文だがな!!)

十話 スシーテンプーラ、ハラキリー、ハラショー！！

「世話になったな、近衛詠春」

「いえ、困った時はお互い様ですよ。では、トーラス……また最終日ぐらいで会いましょう（笑っているが眼が笑っていない）」

「私としては遠慮したいがな」

でもどうせネギ君達がナギの隠れ家に行ったらばれるだろうからなあ……その時ネギ君達に説明したほうが後々楽だろうし……はぁ面倒だ。

「いいか、オレは面倒なことが嫌いなんだ……」

「お前の事なんて知らん、ネギ君が来る時に一緒に来い」

「……はぁ、木乃香にお前がムツツリスケベのことを言おう」

「貴様！！」

「エヴァ！乗れ、じゃあな詠春！！」

危ない、あと少しで斬られるところだった。ただでさえフラジールは紙装甲なのに……

「おい、セロ」

「ん？なんだ？」

「後ろのマフラー……だったか？斬られているぞ」

「なにー！！」

清水寺

「ここに来るのも久しぶりだな」

「ナギに呪いをかけられる前に来たことあるんだっとな」

「ああ、京都は中でも気に入っている」

「一応ネギ君達とはここで合流する事になっているが……あ、居た。
瀬流彦が……」

「瀬流彦！」

「あつ！セロ先生、合流できましたね」

「ああ、サムライマスターには殺されかけたが……」

「ナインブレイカー・詠春もといスプリットムーン・詠春。多分、この世界じゃ剣術最強なんだろうな……いずれ『無念』とか『終止』のような言葉遣いになりそうだ。」

「はい？」

「いや、何でもない。それよりもネギ君達は？」

「ネギ君達なら先に行っていますよ」

「そうか（これまでは何も無かったか？）」

「（はい、新幹線で少々嫌がらせらしきものがありました。生徒が危険になるような事はありませんでした）じゃあ、また旅館のほうで」

「よし、じゃあ行くぞエヴァ」

「茶々丸も先に行ったのか……」

「まあそう落ち込むな、さっさと行くぞ」

軽く放心状態のエヴァの手を引いてネギ君達の居るところに向かう。

『ハイ、チーズ！』

「グギギ……なんだ！私は写真の端っこでポツンと写るタイプの間か！？」

「どつどつ、落ち着けエヴァ。確かに悲しいけどな」

ネギ君達に追いつくとネギ君達は集合写真を撮っていた。そう、私とエヴァが居ないで……

「ほら、写真を撮ってやるから」

「一人でか!?!一人で悲しくか!?!」

「あゝほら、私が居るぞ?」

「……まあ良いだろう」

二人で写真を撮る。そう……二人で……

『パシヤッ』

「あの……そのだな……自分で言っておいてなんだが、悲しいな」
「言つな」

二人でしばらく放心状態になる。私たちを見つけた茶々丸さんが

「あ、あのっ!セロ先生、マスター、大丈夫ですか?」

と言っているが今は聞こえない。聞こえるのは……

『よう、首輪付き……オールドキングだ。突き合わないか?』誤字
にあらず

『変態共が!?!』

という、友達の居ないゲイヴンとオペ子の会話だけだった。

「……………口!……………セロ!」

「はっ!?!今まで私は何を……………」

何処かに意識が飛んでいたようだ。何か古王とかがいたような……
いや、気のせいだろう。

「……………というよりここは何処だ?」

「……………馬鹿な奴らが酒を飲んだから急いで旅館に来たんだろ。忘れたのか?」

「いや、何か記憶がなくてな……………」

多分一時間ほど……………」

「それにしてもどこに向かっているんだ?」

「ん?いや、食事の時間と聞いてな。ちなみに茶々丸は博士が預かっていったから居ない」

「そうなのか、じゃあ行くか」

「……みんな、何となく予想していただろ？」

「誰に話しかけているんだ？」

「いや、何でもない」

私たちが宴会場？（3 - A専用）に行ったら、そこには出て行くネギ君と一部の人たち、そして無人の宴会場。

「……………」

「セロ、私たちはイジメ」

「それ以上は言つな。悲しくなる」

「ああ……………」

取り敢えずエヴァと座る。すると一人の女中さんが料理を持ってきて、にこやかに

「しゅっくり」

……いや、出来ないよ。出来るけどしたくないよ。

「お、寿司だ。結構豪華だな」

「天麩羅、日本食の贅沢って感じだな」

「……そのだな」

「無理をして話すな」

「……すまん。私たち、何しに一日前に来たんだろうな」

「……修学旅行だ。明日はきっと報われるさ」

「……うん」

ゼロの部屋

「ヒヤッハー！大富豪だぜー！！」

「ハッハッハ、私に勝てると思っているのか！！」

「マ、マスター、セロ先生。一体どうなさったので」

あまりにも面白くないのでとうとうおかしくなってしまった私とエヴァ。でも人間ってこうなるよね。

例えば、長い時間一人でいたら何かどうでも良い事なのに笑ってしまったり、

あまりにも暇だからA C 4 Aの虐殺ルートをハードでランクSクリアして歓喜したり……

「さて、ルールは簡単。三が最弱、二が最強。そして特殊ルールで？を出す相手のカードを一枚見て捨てる！！これぞナインボールルール！まさに理不尽！！」

「ふふふ、面白そうだな！！よし、掛け金は！？」

「メロンソーダコジマ汁一本！」

「乗った！」

「あ、あの、お二人とも……」

「準備できているな貴様ら？」

「マギステル・マギ
アームスフオートふ、MMにも飽きていた頃だ」
MMはAFのように発音しよう。

「だ、誰か！マスターとセロ先生を止めてください！！」

「鈍ったものだな……ゼロ・ベルリオーズ……」

「何故君が……エヴァンジェリン」

某破壊天使と某愛人疑惑の人との会話をエヴァンジェリンとする。

ちなみに勝率は8対0だ。どちらがゼロなのか、それは皆が想像してくれ。

「クソッ！これでコジマ汁八本か……私も飲んでやる（グビグビ）」

「オイッ！それじゃあ賭けの意味が無いだろ（グビグビ）」

「自分のお金だから良い！！」

『ドタドタドタ』

「しかし、賭けている品を自分で飲むというのは」

『ガチャツ!』 和室なのにドアとかは突っ込んではいけない

ドアの方を見ると焦った顔をしているアスナ姫と桜咲。

「先生！木乃香が、ってうわメロン臭い!!」

「メロンじゃない!コジマだ!」

「ってそんな事より」

「セロ先生、お嬢様がさらわれてしまいました」

.....

「なんだとっ!!今すぐ追っぞ」

「は、はい!」

「エヴァちゃんも一緒に来てよ!」

「今の私は人間なんだ。だから無理だ」

「.....はい?」

「アスナ!細かいことは後だ。行くぞ、桜咲は相手の行った方向を
教えてくれ」

「分かりました!」

やれやれ、厄介な事になった。

「全く……いいか、オレは面倒なことが嫌いなんだ……」

「も、申し訳ありません」

「あ、何かすまない」

ネタで言ったつもりが本気で答えられてしまった。それよりまだ見つからないのか？

「もうそろそろで……あつ！居ました。ネギ先生が」

「と言う事は犯人が居るのはこっちであつているという事か」

私と桜咲は猿と遊んでいるネギ君を尻目に犯人を追う（ネギ君はアスナ姫が助けました）

「見つけた！」

前の方に猿の着ぐるみを纏っている女。もう少し良い物があったと思っただが……

「ちっ！しつこい人は嫌われますえ」

女が逃げるその先は駅。しかし、私が見たのはそちらではなく、

「ちっ！自動人形か……ネギ君、木乃香のことは任せるぞ！」

「え！？それってどういう事」

げっ！？アイツはもう戦闘モードか。

「取り敢えず頼んだぞー！」

コジマを手に圧縮して……放つ！

「ほら、喰らっどけ！」

「チツ！」

私はネギ君たちと離れて自動人形に攻撃を放つ。まあアイツはそんな簡単にやられるわけではないが……

「全く……君が居るなんて予想外だよ。トールス・レイレナード」

「はぁ……こつちもだ。自動人形……貴様は何番目だ？」

「今のボクはフェイトと名乗っている。ボクもそっちのほうが好きなんですね」

「……私もセロ・ベルリオースと名乗っている」

「そうなのかい？じゃあセロ……と言った方が良いのかな？」

「出来ればな……じゃあフェイト、貴様を倒して木乃香を取り戻させてもらうぞ！」

「残念ながら、ここは通す訳には行かないなっ！！！」

駅の前で、京都での第一戦が始まった。

十話 スシーテンプーラ、ハラキリー、ハラショー！！（後書き）

さて、修学旅行編の二話。

とうとう自動人形君が登場メルツェルではない

取り敢えず駄文ですいません。

日々精進するのでよろしくお願いします。

あ、どうでも良い事なんですが、PSS3が壊れました。

……………ぐすん

さて、では次回予告に行きましょう。

第十一話 正義の味方、アクアビットマン

「く、コジマは……………マズイ」

「実弾ばかりに頼るからそうなるんだ！」

「でも……………ボクは！！実弾兵器を愛しているんだ！！」

「フェ、フェイト……………お前も……………フロム信者だったんだな」

敵との禁じられたフロム愛、フロム好きに悪い奴はいない！

でも……………立場がそれを邪魔する。

「ただ、お話がしたいだけなの！！」

「セロ……………ベルリオース……………」

第十一話 魔法少女リリカル

……………少々お待ちください……………

第十一話 分かり合えないコジマなの？

途中放送ジャックが起きたようです。
まことにすみませんでした。

ではまた今度^^

十一話 自動人形VSコジマ汚染者（前書き）

こんばんわ。水没王子です。

第十一話になりました。そして何より

PV約34,000

ユニーク約6,100

こんなにコジマ汚染者が居たんだなと安心したしだいでございませう。
サーセンw

これからもよろしくお願いします。

では十一話、どうぞぞ！

十一話 自動人形VSコジマ汚染者

そこは既に異世界であった。

緑色の光が辺りを埋め尽くし、一人の少年を襲う。それを遮る様に土の壁が出来る。土の壁が出来たかと思うと、一人の男によって壁は切り裂かれる。土の壁を作った少年は直ぐに離れて上空に土の柱を作り、男に向かって土の柱を降り注ぐ。男はそれを難なく避けると少年の懐に入り地面に叩きつける。しかし少年は受身を取る。それを男は予知していたかのように再び緑色の光を放ち攻撃。

その繰り返しであった。

フェイトSide

「クツ！やはり桁が違う……か」

「ハツハアー！まだまだいけるぜ！フェイトオオオ！！」

彼の放つ攻撃はまさに弾幕だった。一撃一撃が死に追いやる威力。それを何百と撃ってくる。正直ボク自身もいつやられてしまうかわからない。

はつきり言う……サウザンド・マスターより厄介だ。彼はまだ人間だ。人間としては範疇を超えているが、それでも人間らしい動き

をする。しかし

「ミサイル・カーニバルだ！喰らっておけ！！ついでにゴジマキヤノンも追加してやるよ！」

彼は……人外だ。ありえない反射神経、ありえない攻撃数。まるで二つの事を同時に考えて実行しているかのような動き。

「全く……障壁を無視する攻撃なんて……魔法使いの天敵だね」

「そんな私に対して対処できているお前は何だ？」

彼は笑いながらボクに問いかける。ボクは……なんなのだろうか？

「余所見は……危ないぞ？」

ボクの頬を緑色の光が切り裂く。

「……なんで外した？」

「」

……彼は口笛を吹いて話を逸らす。ボクを殺さないで彼にどのようなメリットがあるのだろうか？さっきの一瞬で彼はやると思ったらやれたはずだ。

「……君は、なんの為に生きているか考えた事はあるかい？」

「そんなの毎日だ。何の為に生きて、何のために死ぬか。それを考えるのが人間ってものだ。お前がそれを考えているのならお前は人

間に近づいているんだろっや」「

ボクが……人間？作られた命なのに？

「……何やら考え込んでいるみたいだが……今日はここで止めな
いか？」

「えっ？」

「いやな、さっきまではネギ君達の方で解決したみたいだからな」

「……そのようだね」

先ほどから別の所であつていた戦闘は既に終わっているようだ。多
分、近衛木乃香は取り戻されたのだろう。

「分かったよ。じゃあボクは失礼するよ」

「ああ……フェイト」

「何だい？」

「……今お前が悩んでいるんだっいたらしっかり悩んでおけ」

「？」

「人外になった先輩からのアドバイスだ」

「……一応分かった、と言っておくよ」

……彼は何が言いたかったのだろうか？

ボクは彼の言いたい事が分からないまま依頼主の元へ戻っていった。

ゼロSide

「全く……らしくない」

フェイトが去ってから私は一人ボソツと言う。

「奴もらしくないが、私はもつとらしくなかったな」

何がアドバイスだ、私がアドバイスを貰いたいぐらいだ。

「取り敢えず、木乃香は救出したようだから旅館に帰るか。おっと、その前に」

この荒れ果てた地形をどうにかしないとな（汗

修学旅行二日目（自分的には三日目）

「麻帆良中のみなさん、いただきます」

『いただきます』

「そう、この空気だ。これこそが修学旅行の空気だ」

「……美味しいな」

「あ、あの、お二人ともどうなさったのですか？」

人の居る食事に感動してしまうエヴァと私。それに戸惑う茶々丸さん。確かに今の会話はシユールだったな。

「そんな事より、昨日はどうだったんだ？」

「ん？ネギ君達がどうにかしてくれただようだ。私は別の奴と戦っていたからな」

「別の奴？」

「うーん……悩み事が多い白髪の少年といったところか？」

「何だそれは」

まあ奴はただネギ君を見に来たという感じがするが……

「さてと……じゃあ今日は何処を巡るつか？」

「あ、私が着いていくのは強制なのか？」

「まあそういうことだ。桜咲はどこに行きたい？」

「えっ！？わ、私ですか」

同じ班だという事で近くに座っていた桜咲さんに声をかけるエヴァ。
まあ答えは100%

「出来ればお嬢様の近くに……」

「……まあ妥当な考えだな。では私たちは近衛木乃香の班と同じところに行くか」

「まあ私はそれで構わない。茶々丸さんは？」

「私も構いません。私はマスターの警護が今の任務なので」

今のエヴァは人間と同じだ。まあ死にはしないけど……

「ザジさんは？」

「……………」

「そうか、一人で動物を見に山に行くか。先生としては班行動をしてもらいたいが……まあ別段問題は無いだろ」

「……………」

「そうか、うん、思いつきり楽しんでくるといい」

「ちょっと待て、こいつは何か言ったか？」

「テレパシーだ」

「……………」（コクコクッ）」

「……………そういう事にしておっつ」

食事が終わると私たちは木乃香の居る班の元へ行く。

「へロー、アスナ」

「えっ！？あ、セロ先生。おはようございます」

「（昨日はご苦労だったな。何か甘いものを奢ってやる）今日は一緒に見て回って良いかな？」

「（えっ、いえ、当たり前前の事をしたというか……………私は自分のした事をやっただけです）あ、私は別に良いですけど……………他のみんなは？」

アスナが五班のメンバーに問いかけると全員が一緒に言っても良いと答えてくれた。まだ私の修学旅行は終わっていないようだ（感動）

「じゃあ、桜咲は木乃香と一緒に仲良くな」

「なっ！セ、セロ先生！？」

「木乃香もそれが良いよな？」

「うん、久しぶりにせっちゃんと話したいし、ええやるせっちゃん」

「うぐっ！」（必死にこっちを見る）

……そんな眼で見ても助けてやらんぞ。

『あ……あの、ネギ先生！よろしければ今日の自由行動……私たちと一緒に廻りませんか！』

「ん？宮崎はどうしたんだ？」

「多分ネギ先生を誘いに」

「まあそれは分かるが、何であんなに気合を入れているんだ？」

「はあく先生は分かって無いね〜とても勇気がある事なんだよ」

綾瀬と早乙女にそう答えられる。私には意味が分からない。

「そ、そうなのか？それより綾瀬……美味しいかそれ？」

「微妙です」

メロンサーモン味って何だよ……

奈良公園

「二千万……四千万……六千万……八千万……一億！」

「いや、そんなに居ないからな」

見渡す限り鹿、鹿、鹿。この鹿の皮を弓道具店に売ったら……ふふふ。

「犯罪だぞ、それは」

「何故ばれたし！」

「残念ながら表情に出ていました。セロ先生」

何と茶々丸さんにも気付かれる程に出ていたのか。気をつけないと。

「それにしても……鹿ばかりだな。たまにはイノシシとかゲイヴンとか出てこないのか？」

『よじ……首輪付き』

「!?!?……何も居ないな」

「どっちなさったのですか?」

「いや、気のせいだったようだ」

なにやら古王の声が聞こえたが……気のせいか……

「ん? そういえばあいつらは何コソコソしているんだ?」

目の前には何やら話し合っている綾瀬と早乙女と宮崎。そして何やら宮崎が決心すると綾瀬がこっちに向かってくる。

「先生、一緒に大仏を見に行くです」

「……何かよからぬ事を考えておるな、お主」

例えば私が大仏を見ている隙にAMSから光を逆流させるとか。

「多分先生が考えているような事は無いです。まあ協力してください
い」

「……まあ良いか。綾瀬は大仏とか好きだったよな」

「あ、はい」

「じゃあ私たちに教えてくれ。アレの後を付いていくんだろ?」

私が指差す方向には宮崎とネギ君。

「あ、はい……ご協力感謝です」

「エヴァはどうする？」

「私は茶々丸と一緒に廻るさ」

「ん、分かった。じゃあ茶々丸さん、エヴァの事を頼んだぞ」

「了解しました」

さてと、では二人の後を付いていきますかね……良い趣味では無いけど……

「ありゃ？先生も来てたの？」

「来ちゃ悪いか？私もネギ君の恋人を見たいんだよ。好奇心で」

「最低ですね」

ネギ君達の後を付いて行って、今は大仏殿に居る。

「ちなみに、この大仏の本当の名前はとつたいじるしゃなぶつぞう東大寺盧舎那仏像とつたいじるしゃなぶつぞうと言ってますね」

「ほづほづ」

「いや、のどかの方を見なよ」

「「おつと、失礼したです」」

「何で息が合っているのよ」

『だ、だ、大仏が大好きで!!』

『へえー渋い趣味ですね』

.....

「あれ？これを言う為にここに来たのか？」

「そんなわけ無いですよ！」

『私、ネギ先生がだ、だ、大吉で!』

『うわあ〜ん、大凶でした』

.....

「あ〜綾瀬、私は近くの甘味処に行ってくる」

「あ、は、はい」

「はあ落ち着くな」

私は近くの店に移動して、あえて珈琲を頼んだ。抹茶って書いてあるのに

「それにしても宮崎は大丈夫かな」

まさかネギ君が大好きなんてね。まあ何となくはそんなさぶりを見せていたけど……

「あれ？セロ先生」

「ん？ああ神楽坂と桜咲か、奢ってやるよ。昨日のご褒美に」

「え、いや、そんな」

「ごういう時は遠慮しないでいいぞ。ほら、何でも頼め」

「え、えっと……じゃあ頂きます」

二人とも座り、団子とお茶を頼む。

「それにしても昨日は……ん？」

木の影に先ほどまで見ていた少女。

「宮崎さんか」

「宮崎さん？」

「ど、どうしたの本屋ちゃん」

「桜咲さんに明日菜さん。それにセロ先生」

「まあ何か頼むといい。おごりだ」

「え、あ、ありがとうございます」

木の影から宮崎さんは出てきてちょこんと椅子に座る。

「で、ネギ君には告白したの？」

「ブウウウー!!」

見事に噴出したお茶が私の顔に直撃する。てか熱すぎるだろ。

「アツツー!!」

「あ、スイマセン!!」

少女説明中……

宮崎さんが説明というなのネギ先生の好きな所を語る。その間私はずっと背中が痒かったが……まあ私には縁が無いことだな。

「えへへ、何かなんか皆さんにお話したら楽になりました。桜咲さんも怖い人だと思ってましたけど……そんな事ないんですね」

「だとさ、桜咲」

「へっ？」

「なんだかスッキリしました。私、行って来ます」

そう言うと宮崎は走って何処かに行く。多分ネギ君の所に行ったんだろ。

「……さてと」

私は珈琲を飲み終わるとスツと立ち上がり。

「覗くか」

「さすが分かってるな旦那！」

何故かイタチモドキに賛同される。二人もどうやら興味あるようだし……取り敢えずネギ君の魔力を探して行くか。

『大、大、大根おろしも大好きで……!』

「……ええー!!」「……」

覗きに来た四人がビツクリしてこけてしまう。

「まさかこれを言いたい為に……」

「いや、旦那。さすがにそれは無いぜ」

「しっ！見てください！」

『私、私、ネギ先生のこと出会った日から大好きでした！私……私、ネギ先生の事が大好きです』

『へっ?』

「……オォー!!」「……」

『失礼しますネギ先生』

自分の思いを伝えると宮崎は走って何処かに行く。そして……ネギ君が倒れる。

「ちよつとネギー!!」

「兄貴！しっかりしろ!!」

二人（一人と一匹）はネギ君の近くにより、桜咲は宮崎の走った方向を見ている。そして私は……

「これが……若さか」

と今の自分に無い物を懐かしむように考えていた。

十二話に続くー！

十一話 自動人形VSコジマ汚染者（後書き）

今回のコジマ度は10%となっております。

コジマが足りない！！

と思っているのは作者だけではないはずですw

さて、では次回予告に行きたいと思います。

第十二話 正義の味方、アクアビットマン

戦場を潜り抜けて（フラグ的な意味で）旅館に戻ってきたネギ君に待っていたのは新たな戦場だった。

キスという名の拷問。

それを見て悔しがるアクアビットマン。

「ネギ・スプリングフィールド……貴様だけは許さねえ！」

酷く醜い嫉妬に燃えたアクアビットマン。

それは正義の味方ではなく……ただの負け組の姿であった。

第十二話 初めてのキスはどんな味？正解はコジマ味。これしか認めない

ではまた次回にお会いしましょう^^

四月二十五日

覗きに来た四人がビククリしてこけてします。

覗きに来た四人がビククリしてこけてしまう。

に修正……何だよ、こけてしまっ……自分で見て笑ってしまった
たww

十二話 初キッス、未だに俺は、していない(前書き)

やあ、水没王子だ。

騙して悪いが、まだまだ続くのでな……

……………遅れてスイマセン

今回はコジマ分ゼロとなっています。

駄文となっています。

遅れてこれかよ!!とか遅かったじゃないか……
とかの感想をドキドキしながら待っています。

それでは、どうぞ!

十二話 初キッス、未だに俺は、していない

セロSide

『ぎゃあああああ!』

『ドタドタ!』

『ぶるあああああ!』

……何か約一名変なのが紛れ込んでいたが、大体は3 - Aの声や物音である。

「全く……こんな夜遅くに何騒いでいる」

『コリア!』

「ほら、新田先生から怒られたぞ」

私は自分の部屋から出て3 - Aの所に向かう。行った時には既に

『これより朝まで退出禁止!』

と新田先生が言っているところだった。

「みんな、聞いたか?そういうわけだから静かにするんだぞ?」

『……はあ〜い』

外に出ていた生徒達は落ち込んで部屋に戻っていく。

「ん？朝倉、お前も早く部屋にもどれよ」

「あ、はい。分かっていますよ」

……………凄く怪しいのだが？

「……………早く寝ろよ？もし何かしたら……………分かっているな？」

「アハハ、ナニモシマセンヨ」

……………まあ良いか。さてと今日の結界は更に丈夫にしているから昨日のようなことはならないだろう。

「寝るか」

私は自分の部屋に行って寝具の準備をする事にした。

この時……………もっと真剣に監視を続けていたら……………あんな事にはならなかったのに……………

「これで準備完了つと……カモつち、準備できた？」

既に他の参戦する他の生徒は確保済み。そしてターゲットも就寝中。

『修学旅行特別企画！くちびる争奪！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦+』

『ルールは簡単、ネギ先生にキスをした人が優勝、豪華得点もついてくる。そしてもう一人……セロ先生！こつちが本命！』

確かにセロ先生はまあ顔も性格も良いけど、歳が離れている所為で人気無いんだよね。

『セロ先生の寝ている間、顔に落書きもしくは何かしらの悪戯を成功させた生徒には私から特別報酬だよ！！』

そう、キスは出来ないけど……こつちいう事はやりたがる人間はいる。例えば……

『クツクツク、セロ……今日こそお前に……クツクツク』

『マ、マスター……』

とか

『セロ先生と戦ってもらおうアルよ』

『拙者も少々気になっていたでござる』

とか……まあ本命はネギ君。セロ先生はネタ要員として参加。

「力モつち。これ……セロ先生に気付かれたら生きて帰れるかな？」

「……………姉さんは大丈夫かも知れねえがおれっちは終わったかも知れねえ」

がくがくと震えながらそう答える力モつち。出来るなら……セロ先生に気付かれませんかように……

セロSide

「月輪が一機、月輪が二機……………」

そう、寝るときはそう数えていた。

「月輪が百四十七機（こちらはアサルトキャノンを使う×147）
月輪が百四十八機（こちらはアサルトキャノンを使う×148）
月輪が百四十九機（こちらはアサルトキャノンを使う×149）
月輪が百五十機（こちらはアサルトキャノンを使う×150）」

ダメだ……眠れん。銀翁合唱が聞こえてくるようになってしまった。
このままでは、

「月輪が『一億うー!』とかなってしまいかもしれないな」

取り敢えず布団から起き上がる。

「数えるものを間違っていたか？弱王が一人とか『遅かったじゃないか』……止めとこつ」

『ペタペタペタ』

『マ、マスター、やはり止めたほうが』

『クックック、この油性ペンでアイツの額に肉と書いてやる。いや、肉の絵を描いてやるうか？』

……エヴァか。仕方あるまい。むざむざと落書きされたくないからな。気配を無くして押入れに隠れる。

『スウ〜』

『……ん？誰も居ないぞ？』

『……（押入れの中ですが……）マスター何処かに隠れたのでは？』

『チツ！勘の良い奴。茶々丸！他の所を探すぞ！！』

『了解しました』

エヴァは部屋から去っていく。それを見計らって私は押入れから出る。

「ふっエヴァ、貴様の敗因はスリッパでここに来た事だ」

『アイヤ、やっぱりスリッパを脱いで良かったアルね』

『ふむ、やはり拙者の勘が当たったでござる』

……私が押入れから出て呟くと同時に部屋に入ってくる二人。確かにこの二人なら気配を消して、足音を立てずに来る事は可能だろう。

「……えっと、一応退出禁止のはずなんだがな？」

「あはは、まあそんな事は置いといて、ハア！」

「おっと、いきなりか」

「相手をしてもらうアル」「ふっ」「へっ？」

取り敢えずこの中国娘を投げ飛ばして、

「なっ！？早いでござれ」

「ほら、仲良く寝ている」

忍者もどきに当てる。まあ本気でやったが気を使って威力を半減させていたから大丈夫だろう。

「はあ全く……取り敢えず、ロビーまで持っていくか」

「あゝセロ先生！助けて〜」

「何をやっているんだ？明石、長谷川」

ロビーまで二人を持っていくと仲良く正座をしている二人を発見した。

「あはは〜ちよつと新田にばれちゃって」

「何をだ？」

「ゲームみたいなものですよ。確か……修学旅行特別企画！くちびる争奪！修学旅行でネギ先生とラブラブキツス大作戦+。だったと思います」

「……どんな内容だ？」

「えっと確か、ネギ先生にキスした人の勝ち。特別賞みたいなものがセロ先生に悪戯……だったかな」

……

「主犯は？」

「……一応、言っちゃいけないルールらしいです」

「最新型のデジカメ」

「へっ？」

「もし言ったら最新型のデジカメをくれてやる。明石は参加者だ。そつだな……ペアでいける家族温泉旅行のチケットでもくれてやる」
私がそう言つと二人は頷きあつて口を開く。

「主犯は朝倉」

「参加者は私達のほかにその二人と双子、委員長にまき絵。それとのどかと夕映っち、最後にエヴァさんと茶々丸さんだったかな」
そつか、エヴァも参加者か。フフフ……フフフフフ。

「あ、あの〜」

「安心しろ、例のものはくれてやる」

「いや、凄く悪い顔をしているんですけど……」

「フフフ……フフフフフ」

のちに二人はこう言つたそつだ。

『あの時の先生の顔は何かに汚染された顔だった』

……と。

その頃の朝倉Side

「やべえよ！姉さん。どうやらばれちゃったようだぜー！」

「あ、あはは、あはははは。えっと、取り敢えず参加者の皆さん。そちらにターミネーターが向かっているので気をつけてください」

とあるターミネーターSide

『目標を確認、追跡モードに移行します』

「ククク、既に全員の居場所は把握。後は、近くにいた奴から……ククク」

とあるターミネーターの周りには丸い球体が浮いている。それは攻撃方法であって、それでおかつ索敵用の物である。

『ソルディオス1……距離40。目標ネーム体操少女』

と言つ事は……この曲がり角の向こう側か。

「ネギ君」

「騙して悪いが、私だ」

こっちに向かっていたネギ君（仮）の頭を腕で粉碎する。

「ネ、ネギくん！」

「さて、正座の時間だ」

「いや〜助けて〜」

ずるずると体操少女をロビーに連れて行く。

「あ、まき絵が最初だったのか〜お疲れ〜」

「裕奈、何かセロ先生が恐いんだけど……」

「それは私にも分からないかな〜あ、セロ先生。他の人はみんなあつちにネギ君を居って行ったよ」

「把握している。だが新田先生がいるからこっちは大丈夫だろう。主犯が先だ」

「あ、姉貴！こっちに向かってくるぜ！！」

「こうなりや逃げるよ！カモっち！！」

「誰が？逃げるのか？」

二人が恐る恐る後ろにいるこちらを見る。

「死ぬか殺されるか好きな方を選べ」

「あ、あはは〜どっちも嫌かな〜」

「おれっちも嫌かな〜」

「……仕方ないなあ〜じゃあ朝まで正座+ で済ませてやる」

ロビーに二人、一人と一匹を連れて行くと参加者の全員……いや、エヴァと茶々丸さん以外が正座させられていた。逃げたか……

「新田先生。後は私に任せておいて下さい」

「ん？ああ、朝倉が主犯でしたか」

「ええ、クラスの事なので副担任である私が見てみましょう。新田先生は明日に備えてごゆるりと」

「すまないね、まだ若ければ一緒に居たいのだが、こつも歳をとるとねえ」

「ははは、じゃあ後は任せて」

「うむ、ではまた明日にでも」

新田先生が自分の部屋に戻ると全員座っている前の椅子に座る。

「さて、朝倉……一つ聴きたいことがある」

「……はい」

「何故、俺はネタ要員なのだ？」

「へ？」

「いやな、これは本当にどうでもいい事なんだが……ネギ君と同等の扱いならば『ハツハツハ！中学生ノ悪戯デスネ〜ハツハツハ！ナイス悪戯デ〜ス！』と言っていたかもしれない。あとネギ君はドンマイ」

「足が……痺れそうです」

ネギ君が苦笑いをしながら言うが私には聞こえない。

「しかしだ、私は悪戯要員……」

「いや〜だって先生は年の所為か、人気がさあ〜」

『グサツ！』

私の中で何かに刺さる音がする。いやね、大人になっても辛いものは辛いんですよ。ファースト接吻もまだですし……今までのパクテ

イオーは全て血液などでしたし……男とするとつもり無いし……

「アハハ〜人気ガナイカ〜」

「あ、何か地雷を踏んだ気がする。だ、誰か助けて!!」

朝倉が皆に助けを求めるが、皆が他の方を向いている。

「……………」

「ちよっ!無言で足の上に分厚い電話帳を置かないで!!セロ先生
!ごめんなさい!ごめんなさいってえ!!」

後にこの事件を……『修学旅行、夜通し石抱もとい本抱事件』と呼ばれる事になる。

十三話に続く……

十二話 初キッス、未だに俺は、していない(後書き)

ちなみに石抱とは江戸時代の拷問です。別名算盤責めとも言います。

さて、十二話もとい十二駄文いかだったでしょうか。

「面白くなかった」

などの感想をどしどし頂けると幸いですw

あ、あとのどかの仮契約は行われていますので安心を……

彼女はこれから先でも重要人物ですから……

さて、次回予告

十三話 正義の味方、アクアビットマン！

「お嬢様は私が護る！」

「ハッハッハ！その役目！私も手伝おう！！」

空色の身体、紅く光る眼光！

京都の地に正義の味方が現れる。

「誰だ！お前は！」

「フッフ、私の名前は！！」

第十三話、翼を持つ少女とコジマを持つおっさん

お楽しみに！！

十三話　これが……京都、ハイテクCGを使っているな（前書き）

約一ヶ月ぶりの投稿……

遅れてすみません。

ただ、一つ言える事は……

完結は絶対にさせるつもりと言っ事です。

こんなくだらない作者にくだらない小説ですが、これからもよろしくお願ひします。

十三話 これが……京都、ハイテクCGを使っているな

『修学旅行、夜通し石抱もとい本抱事件』が新たな伝説に刻まれておよそ三時間。

生徒達の正座を止めさせて、軽く仮眠をとらせる。むろん私も眠った。

そして今日は自由行動の日。既に茶々丸とエヴァは自分達で京都見物に行ったらしい。護衛に龍宮がついているらしいから大丈夫だろう。

そう、今日はエヴァも茶々丸も居ないのだ。

と言う事は……

「むろん、生徒達は誰も私を誘うことなく、自由行動に行ってしまうと……やったね！セロくん。一人時間が増えるよ！！（裏声）」

近くにおいてある、旅館の備品であろう人形に話しかける。無論返事はない。

はあ……何か憂鬱な気分になってきた。

「……旅館で寝ているのもアレだし、出かけるか」

ふらふらと私は京都散策もとい暇つぶしに向かうのだった。

『京都の平和は、俺が護る!!』

『わーわー!!』

ふらふらと散歩をしていた私の眼に映ったものはシネマ村近くでやっついているヒーローショー的なもの。

「地元ヒーローかぁ……ん？待てよ……良いこと思いついた!」

そう、この時、私の頭の中で悪魔がささやいたのだ《ヤラナイカ》と……

『キー!キー!』

『金閣寺キック!銀閣寺パンチ!』

『がんばれー!足利マン!』

「待てい!」

戦闘員役の人達と戦っているヒーローこと足利マンを呼び止める声。

『だ、誰だ!』

「天知る、地知る、コジマ知る!」

水色の服を着た男、もとい機械のような服装をした男が颯爽とバイクに乗って現れる。

「コジマ戦士! アクアビットマン!! 参上!!」

そう言った瞬間に男、もといセロ、もといアクアビットマンの背後が爆発、緑色の煙に包まれる。

子供たちはキヤーキヤーと新たなヒーローの登場に喜んでいるが、足利マンはこんな台詞を知らされていない。

『えっと……その』

「コジマパンチ!!」

『ぐはっ!』

まさかのヒーローにパンチ。しかも一撃で鳩尾を殴って仕留める。

「ふっ! 足利マンと貴様らは仲間であるというのはお見通しよ!」

『ええー!』 その他大勢の戦闘員さん

「京都の平和は……いや、日本の平和は俺が護る! 必殺! アサルトキヤノン(非殺傷)」

『ギャー!!』吹き飛ばされる戦闘員の方々

「正義は必ず勝つ!」

『ワーワー!!』

アクアビットマンに拍手を送る子供たち。それに喜ぶアクアビットマン。しかし彼の仕事は終わっていない。故に……

「みんな、これからもアクアビットマンを応援してくれ!それじゃあ、さらばだ!」

フラジールに跨りシネマ村へと入っていくアクアビットマン。

そう、彼の暴走はまだ始まったばかりだ……

『ちょっと!お客さん!!バイクで入らないで下さい!それよりお金を!!!』

(詠春の所に請求書を送ってもらいました)

『百鬼夜行』

『ガヤガヤ』

私がシネマ村に入った時に丁度そのような声が聞こえる。

周りの人達がアトラクションやら殺人やら言っていて見ている。

というよりあそこに居るのは桜咲と……えっと、月詠だったっけ？

「なぐんか忘れていたような気がする」 アクアビットマンコスチュームのままである

『おい！城の上でも何かあってるぞ！』

「あ！！そうだった！」

このままじゃ桜咲が胸を射抜かれてしまう……だったような気がする……！

死なないんだろっけど……女の子が傷つくのはな……

「仕方あるまい。とっっ！」

コジマ粒子を垂れ流しながら城の上まで跳んでいく。

『何だ！あれは』

下に居る人たちから色々といわれているので、答えなければならぬ。い。

私は城の上に『シュタツ』と舞い降りて聖句を口ずさむ。

「天知る、地知る、コジマ知る。コジマ戦士！アクアビットマン参上ー！」

ドーン！と足利マンにあったときのような爆発が起きると観客たちがはしゃぎだす。

「なあネギ君。やっぱりこれってお芝居なんじゃ」

「……ボクにも分からなくなりました」

「それは断じて無い！コジマ戦士、アクアビットマンは本当のピンチにしか現れない」

「ちょっとどいてもらおうよ」

ネギ君たちと馬鹿な会話をしていると私に目掛けてフェイトが突っ込んでくる。

「チツ！フラジール！！」

『ハイ、そのつもりです』

そのフェイトに突っ込むフラジール（戦闘モード）完全自律行動可能なコイツは速度ならばフェイトと張り合える。

『プランD……所謂ピンチですね』

……まあ速度だけだが

『AMSから、光が逆流する！！ギャアアアア！！』

「あ、やばっ!?!」

爆発音と共に壊れるフラジール。君の事は忘れない。

「フェイト！テメエだけはゆるさねえ」

「……あの機械が脆過ぎただけでは無いのかい？」

「……まあ不可抗力というやつだ」

そんな事を話していると後ろから強烈な光が！

「……どうやら近衛木乃香の魔力が解放されたようだね」

「……また、機会を逃したorz」

「……君は何で本気で攻撃してこないんだい。セロ」

「あ、気付いていたのか。まあ本気出したらここら一体が焦土となるからな」

「そうかい……じゃあボクは失礼するよ。また今夜にでもね」

「会いたくねえよ」

フェイトは転移魔法で消える。ネギ君達は城の下で何やら話している。おおよそ総本山に向かうのだろう。

「じゃあ私は先に行って、詠春に話をつけておくか」

そう呟いて私はネギ君達より一足早く総本山に向かうのだった。

「……というよりフェイトに邪魔ばかりされているな」

総本山にて

『貴様！何者だ！！』

「やばっ！服装変えてなかった！！」

「……………」

「……………あの〜詠春さん。何故に私は正座をさせられているのですかね？」

「……………分からないのですか？」

「あ、はい」

何故か詠春に黙って正座をさせられた私。そして刀を抜いて首筋に当てている詠春。

「これは何ですか？」

「ん？シネマ村の請求書だろ」

「死ね」

詠春は言葉と共に私の首を斬る。無論避けるが……

「あの時は持ち合わせが無くてだな」

「……バイクではいる馬鹿が何処に居ますか。あ、ここに居ますね……果てしなく馬鹿にされている気がする。まあ仕方ないが……でも、皆さんには分かってもらいたい。あの時は悪魔（古王）がささやいたからなのだ。いつのも私はもう少しまともな筈だ……」

「お金は返す。それよりももうそろそろネギ君達がこっちに来ると思うから。頼むぞ」

私は鳴っていない携帯を取り、耳に当てる。

「ん？エヴァか？そうかそうか、分かった。今から行く」

「何も声が聞こえませんが……」

「エヴァが呼んでいるから」

「嘘ですね」

「じゃあな！」

『木乃香お嬢様。お帰りなさいませ』

……

「丁度皆さんがこちらに来たようですね。さあ行きますよ。トース」

詠春は私の服を掴み謁見の場にズルズルと引っ張っていく。

「クソッ！なんだ！私を馬鹿にする気か！あの少年達より役に立たなかった私を！！」

「ええ、そうですね。さあ行きましょう」

「チヨッ！マジかよ……夢なら覚めッ……」

「やあ、君がネギ君だね」

「えつと、貴方が関西呪術協会の長……ってセロ先生？」

「やあ……ネギ君」

私は詠春に猫のように持たれ、ここまで連れて来られた。

「すまないね、旧友のトールラスが全く役に立たないで」

「え？旧友？」

「え？トールラス？」

「……あっ」

詠春と私は全く同じタイミングで声を出してしまう。

私は詠春の友「ナギの友の可能性についてはれた事。

詠春は木乃香ちゃんの大好きな本。

『トールラス・レイレナード物語』

の主人公（曰く、トールラスは私の旧友とかほざいていたらしい）が私というのがばれてしまった事だろう（別に私と確定したわけではないが）

「セロさん！もしかしてお父さんの事！？」

「お父様！もしかしてトールラスってセロ先生がトールラス・レイレナード……？」

「え、詠春！お前の所為だからな！」

「クツ！こうなったら仕方ありませんね」

ゴホンと咳払いをすると、周りの巫女さんたちが魔法に関係ない生徒達を別の部屋に連れて行く。そして場が整った所で語りだす。

「……では、改めて、こんにちはネギ君。私は近衛詠春。木乃香の父であり、関西呪術協会の長であり、君の父親、ナギ・スプリングフィールドの盟友です。そして彼が」

「はあ……トーラス・レイレナードだ。訳があつて今はゼロ・ベルリオーズと名乗っているが……同じく君の父親、ナギの悪友だ」

私達は話しだす。と言っても詠春が殆どだが……

それよりも木乃香ちゃんのキラキラした目と、刹那の尊敬の目になる……

はあ、予定ではトーラスの名前がばれるのはもっと後だと思っ
たんだがな……

どうしてこうなった？

「本当におつたんや……トーラス様は……」

「トーラス・レイレナード……最強の魔法戦士」

アル、ジャック……お前らの本では私はどんな人間だ？

「クシュンッ！……ふむ、美少女が私の噂をしていますね」

「ブエックシューーン！……ズズツ誰か強い奴が俺様の噂をしているな？」

ホント……どうしてこうなったし……

十三話 これが……京都、ハイテクCGを使っているな（後書き）

まさかのアクアビットマン登場！正体は不明（笑）

そしてフラジール大破！（復活予定）

更にトールラス・レイレナードと言う事がばれる！？

といった内容でした。

それにしても長く投稿を止めてしまっただけで申し訳ありません。

これからも遅くても投稿し続けるのでよろしくお願いします。

タグに亀更新でもつけるか？

さて、次回はバトル！！

そう、作者はバトルが大好きだ！！

しかし……話を作るのは難しい。でも頑張る。

出来れば頑張って今月中に次話を投稿したい。

では、次回予告（いらなと思うが……）

第十四話、正義の味方、アクアビットマン

「敵はノーマル鬼が百機ほどか……」

「なんや、兄ちゃん。びびっているんか？」

「何を馬鹿なことを？貴様らには水底が似合いだ……いけるな？フ

ラジール」

「ハイ、そのつもりです」

「ふん、そいつは良かった。じゃあいこうか？」

次回！正義の味方、アクアビットマン

『貴様らにステイシスという言葉の真髄を教えてやる』

とうとう主人公が本当の力を……水没フラグでは無い！（と思う）

PS3修理に出したのに戻ってこないでござる……

アーマード・コア？までには戻ってきてくれ！！

十四話 リヨウメンスクナノカミ……くだらない伝説も今日で終わりだ(前書き)
ギリギリセーフか!?

一応六月中に出せそうです。(ギリギリ七月になってしまつかも)
さて、どうでも良いことですが、アーマードコア?が出るまで私は
三国志大戦を頑張っています(A C 5出てもするだろうけど……)

やっぱり蒼天航路と横山三国志は最高だ!
曹操と張遼カッコよすぎる……

はい、どうでも良い事書いてすみません。

では、短いですが、十四話です。どうぞ^^

十四話 リヨウメンスクナノカミ……くだらない伝説も今日で終わりだ

「え、えっと……長さんがボクのお父さんの盟友、それにセロ先生も!?」

「はい、彼とは腐れ縁の友です。そしてこのトールス、今はセロと名乗っているようですが彼も同じく彼とは友人でした」

はあ、全く……少なくとも魔法世界で言おうと思っていたのだがな……

「なあなあ、トールスさま……さんってやっぱり亡国の王子様なん?」

「あれは、私の悪友がでっち上げた嘘だ。まあナギたちと行動していたというのは本当だが……」

眼をキラキラさせた木乃香ちゃんが私に質問してくる。そして詠春、怖い顔をするな。

「では、一流の魔法戦士というのは?」

続いて質問してくるのは桜咲。まあ剣士としては聞きたい事なんだろう。

「まあ紅き翼に居たからな。それなりに強いと思う……詠春、いろんな話は明日にしないか?」

「……それもそうですね、ネギ君達も疲れているでしょうし……で

は木乃香、皆さんを宴会場まで連れて行ってあげてください」

「うん、じゃあネギ君、アスナ、こっちやで」

ネギ君達は部屋から出て行き（まだ何か聴きたいようではあったが）

「さてと……詠春、私は少し外に行くぞ」

「待ちなさい。逃げる気ですか？」

「逃げないさ。少々悪い虫が来ないように見張るだけだ」

「悪い虫？そのことなら結界が防いでくれますよ」

「……歳をとつたな、詠春」

「どづいことですか？」

「いや、じゃあ行ってくる。気をつけておけよ」

「（彼も心配性ですね）分かりました」

私は詠春の屋敷から出て気配を探る。今は夕方、人間一番油断するのは夕方から夜に移る時間帯だ。そしてそれを的確に攻撃してくるのは……

「やあ、また会ったね。セロ」

「私としては会いたくなかったがな。フェイト」

フェイトSide

歳をとった近衛詠春だけなら近衛木乃香の奪取は簡単な事だった。

だけど、ここには戦争が終わっても戦い続けていた英雄と呼ばれた男がいる。

そして現に……彼はボクを見つけ出した。

「やあ、また会ったね。ゼロ」

「私としては会いたくなかったがな。フェイト」

ボクがそう言うのと彼は心底嫌そうにそう言葉を返す。彼の右手にはアーティファクトカード。

「……話し合いは無しかい？」

「私も話し合いで解決したかったのだが……近衛木乃香が目的なら私も手を抜くわけには行くまい？」

「それも……そうだね」

彼から強烈な魔力と殺気を感じる。彼はボクを殺す気だ。ただ……ボクも殺される訳にはいかないからね。

「残念ながら……君の相手はボクじゃないよ」

ボクはとある物を大量に取り出す。

「君の相手は、彼らだ」

「クソツ！これは予想外だった」

「じゃあ先に行かせて貰うよ。セロ」

「待てっ!?!」

君と正々堂々と戦っても、僕に勝ち目は無いからね。

セロSide

「やられたな」

フェイトが残していった私への置き土産、それは……

『クックック、トールス・レイレナードか。我ら同胞の怨み、今日こそ晴らさせてもらっぞー!!』

悪魔が数百体。

「大量の召喚道具を使ったにしても……小さな国の国家予算ほどあるぞこれは……」

総本山の結界から離れているとはいえ、ここでコジマを使っては結界を無力化する可能性がある。それこそ悪魔の大軍勢が総本山に……

「ネギ君達が死ぬかもしれない……か」

これがフェイト以外の人間が呼び出していれば殺しまではしないだろう。だが……私が奴を殺す気でいる以上、奴も私を殺す気であるだろう。

『さて、この数相手に貴様は戦えるか？英雄殿』

「ふん、一応、英雄だ。貴様らこそ、直ぐに死ぬなよ（おい、シュープリス）」

《なんだ、テストメント》

「（力を貸せ。コジマが使えない）」

《………仕方あるまい。貴様の死は我の死を意味する。我らには》

「（ああ、まだやる事が残っている）じゃあ逝っちゃうか……アデアアッ
ト……」

悪魔 Side

『何だよ……何なんだコイツは!!』

ありえなかった。奴は所詮人間だ。どう足掻いても数の暴力には勝てない。

そう我らは思っていた。

それが何だ？

数の暴力？笑わせるな……

『シネエエエ!!』

「シュープリス!! 《ああ、千の雷》吹き飛ばべ!」

奴は上位呪文を無詠唱で行い……

「アデアット！賢者の鎌よ。敵を切り裂け！」

アーティファクトで我らの同胞は一撃で斬り殺される。

『……どっちが悪魔だ』

「さてな」

いつの間にか私の後ろに奴は回りこんでいたようだ。奴は笑っていた。

「ただ、貴様らの考える悪魔は……私の考える悪魔とは違い、温過ぎる」

『化け物が！』

私が……奴に言えた言葉はそれだけだった。

ゼロSide

斬り裂く、焼き殺す、殺す、殺す、殺す。

ただ、それだけの単純な作業を繰り返す。まるで魂の無い人形のよ
うに、

今の私は人から見たらどう映っているのだろうか？

悪魔？

否、温過ぎる。

鬼？

まだ、温過ぎる。

《貴様のような奴はな……鬼神というんだ》

「鬼神……か」

思いがけない所から答えが帰ってくる。

「シュープリス、今の私はどんな顔だ？」

《笑っている。それこそ、悪鬼羅刹と言われても文句の言いようが
無いぐらいにな》

「そうか、笑っているのか」

召喚された悪魔の目には笑っている自分の姿が映っている。それは
もはや悪魔すらも恐れるような顔だった。

「ククク」

《何を笑っている？》

既に悪魔達は自分達で転移魔法を使い、逃げようとしている。私はそれを殺しながら、自分の内に居る者、シュープリスに話し続ける。

「いや……悪鬼羅刹のような男が英雄かと思って、な」

《貴様はかの羊達の英雄、ナギ・スプリングフィールドと違い、歪んでいる》

「ああ、私はナギのように綺麗な心を持っていない」

《だからこそ、私は貴様と生きていく道を選んだのだ。そして……》

「とある計画を実行する。それが私達の役目であり」

《我の咎だ》

「安心しろ、シュープリス」

最後の悪魔の背中を斬り捨てながら言う。

「一心同体の今となっては貴様だけの咎ではない。我らの咎だ」

《……そうだったな》

「さて、こんなに馬鹿にされたのは久しぶりだ。さっさとフェイトを見つけて、ん？」

悪魔を全て狩り終った私の眼に映ったのは、遠い湖の上で復活する神の姿だった。

「……ほう、ナギたちが封印した伝説の鬼神か」

《どじするっ》

「奴の魔力はどれくらいだと思っ？」

《……そうだな、今の麻帆良の世界樹ぐらい……だろうか》

「そうか……じゃあ奪うか」

《奪う……か》

「ああ、私達のやるべき事には魔力が必要だ。故に奴から奪う」

《……そうだな。それに私自身、貴様とあの神が戦うところが見てみたい》

「鬼神対鬼神か……面白いな。では、行こうか。シュープリス」

《ああテストメント》

「リヨウメンスクナノカミ……くだらない伝説も今日で終わりだ」

旧き鬼神は地獄を見る事になるだろう。

今からそちらに向かうのは、鬼神という名の化け物だから……

十四話 リヨウメンスクナノカミ……くだらない伝説も今日で終わりだ（後書き

十四話、約三千文字……すくねえ！！

本当にスイマセン

しかも、リヨウメンスクナノカミ戦は次に持ち越し……

……多分、あと二話〜三話で修学旅行編は終了です。

ちなみに作者はアーマードコアもエースコンバットも大好きです。
エースコンバットはZEROが大好き^^

最近は魔法世界編の話がどんどん思いついて困っています（笑）

それよりも、今のネタを考えると！俺の頭！！

さて、では次回予告

第十五話、正義の味方アクアビットマン

地上に現れた終末の神、リヨウメンスクナノカミ

しかし、それに対抗するのは科学が創りし神、アクアビットマン

強烈な攻撃を繰り返すリヨウメンスクナノカミ

紙装甲のアクアビットマンはコジマを爆発することができるのだから
うか？

次回、人が創りし神、その名もデモン・ベイ……げふんげふん、ア
クアビットマン！

では、また今度^^

十五話 デカイだけでは意味が無い（前書き）

遅れてスイマセン。

オリジナルの小説を書いていました。

反省もしている後悔もしている。そして公開もしている……

では十五話ですどうぞ^^^

（六巻の内容なのに十五話ってこれいかに？）

十五話 デカイだけでは意味が無い

「ある日、森の中へ汚染者に出会った。粉舞うゴジマ道」

「ん？この声は」

「ゼロ先生アルか！？」

私は悪魔達をお仕置き（という名の拷問）した後、リョウメンスクナノカミの方向に移動していた。そしてその途中で生徒二人を見つける。

「おいおい、生徒は外出禁止だぞ？龍宮、古」

「おや、それだったら、刹那やアスナを叱ってくれ」

「ついでにバカリーダーもアル！」

二人は大量の鬼や式に囲まれていた。

「最近は大量の魑魅魍魎に囲まれるのがブームなのか？」

「どうしてだい？」

「私もさつき悪魔に囲まれていた」

「それは可哀想だね」

「悪魔？それって強いアルか？」

「まあ私よりは弱い。さてと……」

私は大量の魑魅魍魎に言う。

「こいつらは残すから先に行かせてくれ」

「教育者の発言ではないね」

「先生！酷いアルよ！！」

『カツカツカ！それは無理だ！！』

鬼の上位種と思われる者が巨大な金槌を私に向かって振り下ろす。しかし、今の自分は正義の味方（笑）アクアビットマンではない。ゼロ・ベルリオーズなのだ。ならば戦闘力は53万を通り越した、二億コジマだ。（1コジマがスウター観測1万と考えてください）

「大した威力だ。だが遅すぎる！」

そう、今の私はアクアビット本社を一人で潰したジョシユア・グリントと同等格、いや、それ以上の存在なのだ！！

『何だと！？』

アーティファクトで召喚したレーザーブレードで相手を真つ二つ。ソルディオスですら斬れる武器だ。鬼が斬れない道理は無い。

「もう一度言う。そこを通せ、邪魔をするな」

『……………クツ！しかし！！』

ふむ、流石に簡単には通してくれないか。いや、召喚主にそういう命令をされているのか。

「龍宮、これをくれてやる」

アーティファクトで出したパルスガンで龍宮に渡す。

「古にはこれだ」

渡したものはみんな大好き、

「……………要らないアル」

とつつきだったが、戻された。ふむ、確かに女の子が使っには重過ぎるからな（そういう問題ではない）

「さて、なら私は先に行かせて貰うか」

『遠さねえと……………何だそれは！！』

私の後ろに現れるものはプチVOB……………プチと言っても私よりも遙かにデカイが……………

「最初から強行突破をするべきだったな。では失礼」

そう、私は間違っていた。

全員考えて欲しい。ACFAのOPを……私の予想ではかのホワイ
ト・グリントのように徐々に徐々に加速するものだと思っていた。

故にPAも展開させずただただ、ドキドキしていた。

しかし、現実はどうだ？

「ギャアアアアアアアアアア！！！」

……アレほど急発進、超加速だとは夢にも思っていなかった。

VOBでリヨウメンスクナノカミの元に向かって、ただいま約一秒。

私の視界には近衛木乃香を救った翼のある桜咲刹那の姿。そしてネ
ギ君を殺そうとしたフェイトを吹き飛ばしたエヴァンジェリン。前
方に飛んでいる茶々丸さん。

……つて！？エヴァが何故魔法を使える！！

と、そんな事よりも直ぐリヨウメンスクナノカミに突撃してしま
う（ただいま約三秒）

「エヴァ！それは私の獲物だぁー！！」

と叫んだ瞬間にエヴァがこちらを向いて驚いているが、そんな事をいちいち確認している暇は無い。

アーティファクトで特製グリントミサイルを二十八発（×8）ソルディオスによるコジマキャノン二発。オマケに……

「お中元だー！！」

VOBを外しリョウメンスクナノカミにぶつける。すかさずエヴァが

「やったか！？」

とかほざきやがった。やったか？「やっていない、のフラグをエヴァは立ててしまった。畜生……」

『グオオオオー！！』

ほら、まだ生きているじゃないか。まあ単に火力不足だっただけだが……

「ハッハッハ！セロ、私が倒してやるっか？」

「うるさい、其処で見ている」

……と言ってもコジマキャノンを撃ちすぎるとリョウメンスクナノカミの持っている魔力を消してしまう。そうなら意味が無い。となれば

「物量で押し切るのみ」

先ほどの分裂ミサイルとは変わって、GAの高火力ミサイルを二百発召喚。リヨウメンスクナノカミを囲むように展開。

「全弾直撃……プロトタイプネクストぐらいなら落ちるはずだが……」

『グオオオオ!!』

リヨウメンスクナノカミは対物理障壁のようなものを張って防いでいた。無傷とはいえないが、ダメージは微々たるものだろう。

「仕方ないか……少々エグイ手だが……」

両手にパイルバンカーを召喚（カツコ良く言っただけでとっつきである）一気にリヨウメンスクナノカミの胸元に向かう。

『グオオオオオ!!』

無論リヨウメンスクナノカミも四本の腕を使い迎撃をしてくるが、先ほどの鬼と同様、いやそれ以上に

「遅すぎる!!」

胸元目がけてパイルバンカーを突き刺す。ズブリと嫌な感触がするが私は躊躇無く引き金を引く。パイルバンカーは途轍もない爆音を辺りに響き渡らせる。

「グオオオオオオ！！」

大量の血が私の身体中に纏わりつくが、私は何度も何度も引き金を引く。およそ奴の体の中には魔力が流れている器官のようなものがあるはずだ。それを見つげるまでパイルバンカーで攻撃し続ける。

「ッー！」

リョウメンスクナノカミはもはや言い表すことが出来ないほどの絶叫を上げて私をその巨大な腕で攻撃する。PAを使っていないので途轍もないダメージだ。既に骨が数本折れる音がしている。

「だが、止めてはやらん」

爆音、絶叫、流血。

今、私が感じるものはこれだけ。

そして見つけている物は奴の魔力。

「ここか！？」

ある程度相手の胸を抉った所に大量の魔力が流れている所を発見した。後は、奴の魔力を頂くだけだ。

「私が大事に使ってやる。故に死ね」

大量の魔力が流れている所に私は腕を突き刺す。そしてある言葉を呟く。

『
』
これはコジマ粒子を応用したのではなく、古代呪文の一つだ。相手の魔力が無くなるまで奪い取る魔法。すなわち、相手に残されている運命は……

「な、なんや！？リヨウメンスクナノカミが消えるやて!？」

眼鏡をかけた女が驚いているが、そうこれは召喚獣のようなものなら消滅、人間なら死に追いやる恐ろしい呪文だ。しかし、計画のためなら仕方あるまい。

「私に挑むにはまだ力が足りなかったな。リヨウメンスクナノカミ、先に逝っている。私も直ぐにそちらに逝く」

私が手をリヨウメンスクナノカミから抜くとあの大きかったリヨウメンスクナノカミが塵も残さず消えてしまった。

「やはり、君が一番厄介だったね」

『セロさん!?(セロ、セロ先生!)』

目の前からいきなり転移を使い現れるフェイト。どうにかして私を殺したいようだ。そして私に忠告をする下のネギ君にお姫様にお嬢様に剣士様に吸血鬼さん(恐ろしいメンバーだな)

「フェイト、考えが甘いな」

「クツ!？」

コジマキャノンに奴の腹部に撃つ。まあ奴がこの程度見切れないわけ無いのだが……

「……やはり君は別格だね。君がネギ君の元に居るのならばまた会うことになるだろうね。じゃあね」

「失せろ」

コジマブレードで相手の首を刎ねる。といっても相手は偽物なのが……

それにしてもフェイトか……ネギ君の元に居なくても奴とは会う事になりそうだな。まあ計画としてはまだまだ先の事だが……

「ゼロ！こつちに来てくれ！！」

ん？エヴァが大声で呼んでいる。エヴァの近くには石化によって倒れたネギ君とそれを見守る生徒達。

「どうした？」

「坊やが死にそうなんだ。助けてやってくれ！私は回復呪文が苦手なんだ！！」

「と言っても私がこの石化を強引に解くと魔力を失うぞ？」

回復呪文を使わずコジマで強引に引っぺがす事になるからな。

「クッ！？どうすれば……」

「なあなあセロ先生」

「ん？どうした近衛？」

「先生とチューしたら魔法が使えるん？」

ふむ、確かにネギ君と仮契約すれば近衛の持っている回復適性の高い魔力でどうにか出来るだろう。

「ああ、近衛の持っている回復適性の高い魔力で何とかできるだろう」

「ならカモ君」

「オツシャ！任せる！！」

これで一件落着か。

「じゃあ『セロ』先生、行くで？」

「ん？」

チュツ 『仮契約』

……………ん？ん？ん？ん？

「頑張つてや、ネギ君」

「ちょっと待て！？何かとてつもない事が起きたような気がしたのだが！？」

「……よかった、皆さん。無事だったんですね」

ちよっ！？そんな事ではない！！

『やった〜！！』

全員喜んでいる場合じゃない！！

「ちよっ！話を聞け！！」

「セロ、あれは仕方の無いことだ。近衛詠春にもそう言うておく」

「畜生、チクシヨ〜！！」

石化中の詠春

『ガタガタ、ピシッ！！』

何故だがその時に彼の形をした石に亀裂が……

十五話 デカイだけでは意味が無い（後書き）

ちよつと急ぎで書いた所為で誤字脱字があるかも知れないのでその時はご指摘よろしくお願いします。

そういえばこの小説もいつの間にかお気に入り登録100件に到達していました。

嬉しい気持ち反面、プレッシャーも……

……頑張つていきます!! 目指せ総合評価四桁!!

では次回予告

第十六話 正義の味方、アクアビットマン

「トールラス、貴方は何をしたのか分かっていますね？」

「わ、私はアクアビットマンだよ？」

「……二十秒数えます。遺書を書いてください」

「オイ、マジかよ…… 夢なら覚め」

第十六話 義父さん、と呼ばせて『ズバツ』ぎゃあああ!!

では、また次回^^

十六話 昔話は嫌いだ（前書き）

とうとう修学旅行編が終了です。

コジマ分は0パーセント

戦闘も0パーセント

基本会話のみ

しかし、みんな大好きとある物の存在が！！

では十六話です。どうぞ^^^

「酷い目にあつた」

今私がいるのは旧アルゼブラモといアルブラ（紅き翼）の秘密基地。ネギ君達は一度旅館に戻つたが、私は詠春との話し（拷問）があつたのでここで休んでいる。

「それにしても、私の荷物をここに置いているとは……まあ自分の家も持つてなかつたから仕方ないと思うが」

実際、ラカンかアルが売りさばいているかと思つたが……あいつらも人だつたという訳か。

「それにしても……よくこんなに集めたものだ」

私が見ているのは私がまだトラス・レイレナードだつた頃に集めた魔導書や魔法入門書。

コジマが使えるのに何故そんなものを集めたか……それは一度でもいいから魔法というものを使いたかつただけなのだが……

「結局一度も魔法を使えなかつたんだよな」

まあ今は少しチートを使つている所為で魔法も使えるが……

「それにしても懐かしいな……久しぶりに読んで見るか」

『ガチャ』

「……………ふむ、面倒な術式だな」

「トールラス、ネギ君達が来ましたよ」

「……………む、この術式はこっちにした方が……………」

「トールラス!!」

「ん?なんだ、詠春か」

私が本に集中していると、いつの間にか隣に来た詠春が私から本を取り上げる。

「どうした?」

「……………はあ、ネギ君達が来ましたから上に来てください」

今私がいるのはこの隠れ家の地下室。といつても私の荷物が置ける様にだけスペースをとった小さなものだが……………

「分かった。ネギ君もワクワクドキドキしているだろうからな。行こうか」

地下室から一階に上り、二階に行く途中にナギのマグカップを見ているエヴァを呼んで上に向かう。

そこにはネギ君がナギの持っていた魔法関連の本を見ていた。

「どうですかネギ君」

「あ、長さんにセロさん。見たいものや調べたいものがあって時間が……」

「ならば一部を持って帰って、詠春が鍵をネギ君に渡しておけば良いだろう」

「そうですね、実質ネギ君の物といっても良いですから」

「あ、あの。長さん、お父さんの事を聞いても良いですか？」

ネギ君がそう言つと詠春は下にいる近衛と桜咲。それにアスナ姫を呼ぶ。全員が集まると彼女達に一枚の写真を見せる。

「この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達です……黒い服が私です」

「へえ〜これが」

「これが父様？若いなあ」

「私の隣がナギ、この時十五歳です」

「父さん」

「おい、近衛詠春。こいつの写真はどうした？」

エヴァは突然私を指差し言う。

「確かにセロ先生も悪友とかいつていたわね」

「なあ父様。トールラ様……セロ先生の写真はないん？」

「彼はこの写真を撮った後に紅き翼のメンバーになりましたから別の写真が……ありました」

詠春は近くにあつたもう一枚の写真を撮り全員に見せる。

そこには大戦時の蒼いコートを着ている私一人の写真。

「なあ父様。なんでトール……セロ先生は一人で写っているん？」

「それは……」

詠春の顔が曇る。まあ全員集まってもう一枚写真を撮る予定だったからな。帝国のおてんば姫やナギの奥さんであるアリカ姫などと一緒に……

それが思いがけない事が多く、大陸は落ちるわ、アリカ姫は捕まるなど色々な事の所為で私の搜索を諦め、他の事を優先させた事を今でも悔やんでいるんだろう。と思いたい。

「近衛……と言ったら詠春と被るな。木乃香ちゃん、それは私の所為なんだ」

「セロ先生の所為？」

「私は大戦終了時に起きたとある事故が原因で行方不明ということになっていたんだ。今も行方不明となっているだろう。大戦が終了してもう一枚写真を撮る事になっていたのだが……まあ私がさつさと傷を癒して詠春たちと合流していれば良かったのだが……なにぶん傷が深かったものでな……」

「そうなんか……じゃあ生きているってちゃんと教えれば良かったんじゃない？」

「まあそこは行方不明……実質死んだ事にしていたほうが動きやすいことなどあったからな。木乃香ちゃんも今回の件で分かっただろう。魔法使いが存在を隠す理由が」

私が存在を隠したのは自分の事を優先させるためだが、魔法使い、特に名の通った魔法使いはいろんな意味で目立つからな。

低レベル、それこそ物を浮かす程度の魔法なら超能力とか言って誤魔化せるが、攻撃能力の魔法などが世界に存在すると分かったらこの世界は戦争になりかねないだろう。強い力を持つものを恐れる。それが人間というものだ。

「そして、私は大戦終了の約二十年前。ナギも十年前から記録上は死んだ事になっている。だが、私はこうして生きているし、ナギも同じような理由で生きている可能性がある。何せ紅き翼の筆頭だからな。だな、詠春」

「はい、確証はありませんがナギが死ぬなんて考えられません。希望的観測では何も言えませんが……これ以上のことは私でも、すいませんネギ君」

「いえ、長さん、セロさん……いや、父さんの戦友であるトーラス・レイレナードさん、近衛詠春さん。話を聞かせていただいております」とうございます」

「まあ私は昔話が嫌いだから大量に端折ったが……少しは何か手がかりになるものがあつたかい？」

「はい！」

元気に返事をするネギ君。ふむ、確かに何かを得たような顔だ。まあ六年前に助けてもらっているから生きている可能性が高いと思つたのだらう。私も生きている方に二万ペソ賭けるが……

「難しい話は終わった！記念撮影を撮るよ！！！」

朝倉がそういつて二階に上ってくる。私と詠春以外は一階に降りていく。

全員が降りると詠春は下を見ながら口を開く。

「……トーラス」

「なんだ？」

「オステイアが落ちた後、私達は……」

「アリカ姫を優先した。まあそれが当たり前だ。私はオスティアの下に落ちたのを目撃されているんだ。仕方あるまい」

「……すみませ」

「それ以上は言うな。貴様らは悪くない。それと」

私は詠春を見ながら言う。

「こんなムサイ男を救うよりお姫様を救ったほうがよっぽど思い出になるだろう」

「……………クツ、ククク、そうでしたね。貴方は……………いや、お前はそんな性格だった」

私の顔を見て笑い出す詠春。

「それにしても……………ナギの息子にお前の娘。二人が魔法に、魔法世界に係わりつつある……………か。そんなに時間が経った覚えは無いのだから」

「私もそう感じてしまいます。ですが、ラカンやトーラスは歳をとっても老けないようですからね。私よりもその思いが強いでしょう」

確かに詠春は一気に老けたように見えるな。まあ仕方が無いが。

「そして……………トーラス。お願いがあります」

「ん？なんだ？」

「これは勝手な願いですが……関西呪術協会の長としてではなく、一人の親として……木乃香を頼みます」

「……何か私が木乃香ちゃんを嫁に貰う的な台詞だな」

「ふざけないで下さい……フェイト・アーウェルンクス。おそらく大戦時と一緒に奴らでしょう。情け無い事に今の私では……」

まあコイツも人の子だしな……自分の娘を心配に思うのも仕方あるまい。

「勝てないだろうな。平和ボケしすぎだ」

「すみません」

「だが安心しろ。最高の守りを保障してやる」

「……ありがとうございます。ですが、結婚するのはもう少し後で……」

「いや、するつもり無いからな」

「木乃香の何処に不満があるんだ!!」

前言撤回、コイツはもうタダの親馬鹿だ……

とある国道

「……………」

「……………なあ」

「何だ」

「やっぱり帰りはこれなんだな。しかもボロボロの」

「文句を言つな」

修学旅行最終日。私とエヴァは大破したフラジールに跨り学園に帰っていた。

最高速度、60キロ。高速は走れずトトロと走る。速度は出せるが空中分解する可能性がある。

「そういえば、何故エヴァは魔法を使えたんだ？」

「それは学園長に一時的に呪いを騙すように指示したからだ。五秒に一回『修学旅行中に魔法を使うのは授業の一環である』と書いてある紙にサインを書く。だったか？」

「……………学園長にこちらの騒動が終わったことを連絡したのか？」

「……………貴様がしたのではないか？」

「いや、てつきり瀬流彦くんがやると思っていたが、現地の事でドタバタやっていたらしくて、ネギ君が誰かがしたのかなあ〜と……………」

「……………結局誰もして無いいということか」

「……………そうだ！詠春がしたのかもしれない！！」

「奴は自分の事に手が一杯だろう」

……………

「……………まあ誰かがしてくれているだろう」

「……………私からしたら、この呪いを解除できなかった罰だ。それぐらいあって当然だろう」

私は学園長の事を考えるのを止めた。何故なら、面倒だったからだ。反省はしている。後悔はしていない。

とある妖怪頭

「ひい！まだか？まだ騒動は終わっておらんのか！？流石にもう終わって、しかし、終わってなくてネギ君達が危険になったら……誰か！連絡を入れてくれ！！」

ちなみに、連絡が入ったのはネギ君達が麻帆良の土地に帰ってきたころだったという。

次の日、学園長室に一人の妖怪が死んでいたという伝説がある。

学園長室には妖怪の死体が安置されているらしい。

麻帆良の七不思議よ

り抜粋

十六話 昔話は嫌いだ（後書き）

フラジールは死にません。永遠に（笑）

ということでは修学旅行編でした。

次回はとうとうネギ君の弟子入り編！

七巻は書く内容がこれぐらいだから助かる^^

と言ってもまだまだ先は長いですけど……

それにしても評価の高い小説は凄いですね。

戦闘描写とか、戦闘描写とか、ギャグとか……

まあ私にはそんな才能無いですからコジマで何とかしますがね^^

どうでも良いことですが、

一応、感想は誰でも書けるようにしてありますので、どんなことでも良いので感想をいただけたら幸いです。

例：フラジールカッコイイですよ。答え、カッコイイです

ホワイト・グリントとジョシユア・グリントどっちが好きですか？

答え、ジョシユア・グリントの方が私は好き……
などなど

はい、下らないこと書きすぎました。スイマセン

では、次回予告

十七話、正義の味方、アクアビットマン

「ククク、私の弟子になりたいのならまず足をなめろ」

「そしてこのアーマード・コアFAを全ミッションSにするのだ」

「虐殺ルートのSランクハードクリアなんて不可能だ!!」

「ネギ君、諦めたら其処で終わりだ。一回で無理なら十回、十回で無理なら百回するんだ」

「ク、クソ。こうなったら壁撃ちを……」

「それは許されない。両手ライフルだ」

「そ、そんな……」

第十七話 弟子入りテストは絶望的！

ではまた次回^^

十七話 予兆（前書き）

たくさん感想ありがとうございます。

やはり感想を頂けると嬉しいものですな。

さて、十七話ですが、約二千文字と短いものとなってしまいました。
すいません……

十八話を早く投稿できるように頑張りますので許してください

では、十七話をどうぞ^^^

十七話 予兆

色々あつた修学旅行から帰ってきた週の日曜日。

「今日は日曜日。と言っても特にやることの無い私は何をすれば良いのだろうか？」

朝の日課である鎧土竜たちの餌やりを済ませるとソファにすわり一人で考える。

「うーん……何か」

『トントン』

「ん？誰か来たか？」

管理人室のドアをノックする音がしたので開けてみる。そこには

「セロさん！弟子にしてください！！」

眼をキラキラさせたネギ君と付き添いのアスナ姫が居た。

「……はあ、ネギ君」

「ハイ！」

こんな面倒な事は……

「ちょっと付いてきてくれ」

「あっ！ハイ！」

「それで……坊やを私の所に連れて来た理由は？」

「いや、魔法使いで無い私が教えるよりも、最強の魔法使いであるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに教えてもらったほうが私なんか教えるよりも強くなるだろうからな」

「最強？ハツハツハ！確かに私は最強の魔法使いだ！」

人に押し付けるに限る。私のおべっかによりエヴァは上機嫌。これならばネギ君を弟子にしてやるだろう。

「えっ！？じゃあエヴァンジェリンさんが……」

「そうだな、ではまず足をなめろ。我が僕として永遠の忠誠を誓え。そしたら弟子にしてや、何言ってるのよ！！」「あぶう！？」

ふむ、これは予想外だったな。てっきりネギ君が直ぐに足をなめて弟子になるかと思っていたが（なわけは無い）アスナ姫が止めるとは……二人はギャーギャー言い合っている。ネギ君はそれを止めようとオロオロしているが……

「茶々丸さん。珈琲をくれないか？」

「了解しました」

私は止めない。厄介ごとに巻き込まれるのはゴメンだ。

「クツ……分かったよ。今度の土曜日にもう一度ここに来い。弟子にとるかどうかテストをしてやる」

「え！？あ、ありがとうございます！エヴァンジェリンさん」

どうやら話し合いは終わったようだ。満面の笑みでネギ君はエヴァの家から出て行きアスナ姫はネギ君を追いかけていく。

「で、お前は何を考えている？」

「ん？」

茶々丸さんが持ってきたクッキーを摘みながらエヴァの方を見る。

「って！？それは高級な！しかも珈琲も一番高いやつを！」

「おお、やたら美味しいと思ったら。ありがとうございます」

「……チツ！茶々丸、私には紅茶を」

「了解しました。マスター」

高級なクッキーか……安いクッキーを食べる時と同じ気持ちで食べていたな。勿体無い……

「それで、何で坊やを私に弟子入りさせた？」

「ん？それは『私』が魔法を使えないからだろう。私の戦闘はアーティファクトと特殊能力しか使わないからな」

「確かに貴様が魔法を使ったところを見たことは無いな。魔力を感じない緑色の光を操っていたが……」

「あれが私の特殊能力だ。まあ魔力に近いものでも思っていてくれ。そんな私がネギ君に魔法を教えるわけにもいかないだろ？」

「まあな。しかし、坊やはナギの息子。しいては英雄の息子だぞ？それを吸血鬼の私に師事させるのか？普通の人間なら考え付かない事だな」

「残念ながら、私は普通ではないからな」

私がそう言うとエヴァはぽかんとした顔になる。そして

「クツ……フッフ、そうだったな。貴様は、いや貴様らは普通の集団ではなかったな」

「普通なのは詠春と……あいつも普通では無いな。他には……ジャック、アル……ゼクト、ナギ……まともだったのはガトウぐらいか？」

「変人集団が世界を救った英雄とは……世も末だな」

その言葉に私は思わず顔をしかめてしまう。

「む？どうした？」

「いや、私は英雄と言われたくないからな。そんな事よりもエヴァ、ネギ君の弟子入り試験の内容は何だ？」

「ふむ、どんなものにしてようか考えているところだ」

「そうか、まあ弟子入り試験の時は呼んでくれ。ネギ君の実力というものを知りたいからな」

そう……全ては未来の為に……

エヴァ Side

「では失礼するよ。エヴァ」

「ああ、さっさと帰れ」

半日以上私の家にいたセロが自分の家に帰る。全く、奴は遠慮という言葉が無いのか。

「それにしても、英雄と言われたくない……か」

私には想像できない。数々の栄誉を手にした紅き翼のメンバーの一人。大陸が崩壊した時に一人それを防ぎ、死亡者を出さなかった働き。そして死んだとされた……

「全く、自己犠牲なんて……英雄そのものじゃないか」

魔法世界では奴を元にした物語が今でなお流行っている。それこそ魔法世界の全員が知っているぐらいだ。

「……『人殺しが英雄なんて馬鹿げている』か」

奴が私に言った言葉。それは罪の意識からか、それとも別の何かなのか……

「坊やの力を見たいといった後に、奴は何かを考えていたな。奴は何を考えている……」

そう、其処が全く分からない。普通の人間は目的の為に行動する。それはどんな人間でも共通するだろう。坊やは父親に追いつきたい。じゃあ奴は？

奴は何の為に生きている。何の為に坊やを助けている。

「……はあ、私らしくないな。茶々丸、紅茶をもう一杯頼む」

「了解しました。それと、マスター」

「ん？」

「ゼロ先生が帰り際にこんな物を落として行きました」

「ん？これは魔法世界の傭兵ギルドが書いてあるな。
…後で調べてみるか」

？
…

?????Slide

『…………聞こえているか？』

『ああ、鮮明に聞こえている』

『盗聴の危険性は？』

『有り得ないだろう。魔法世界でもまだ開発されていない技術だ。』

「元老院だろつと、完全なる世界の残党であろうと無理だろつ」

「そつか……そちらの調子はどつだ？」

「順調だ。しかし、やはり一部の人間からの妨害は激しいようだ」

「……か。奴なら私の考えが分かるかもしれないからな。しかも近くに　もいる。全く、助けたことが仇になったか」

「しかし、我らの戦闘能力は既に奴と同様。もしくはそれ以上の人間もいる。壊滅する事は無いだろつ」

「それならば安心だ。計画はそろそろ第二段階に入る。そちらの準備はよろしく頼む」

「ああ、全ては人類未来の為に」

「そつ、我らは未来に託さないといけない」

「『未来の人類に黄金の時代を……』」

十七話 予兆（後書き）

二千文字とか……短すぎだろ……

今までは大体四千文字を維持していたのに……
しかし、話の区切りが良いのがここだったので……

さて、今回の話では今後のキーポイントを大量に出しています。
まあ、頭の回転が速い方は何となく分かると思いますが……

それにしてもいつの間にか週間アクセスが700を超えていてビツクリしてしまいました。最初は100未満とかだったのに……

やはり、作者としては嬉しいものですね^^

ちよつと息抜きで番外編も企画しています（早く続きを書けよ……俺）

では、次回予告

十八話 正義の味方 アクアビットマン

「クッ！強い！何だこの人は！？」

「フッフ、坊や……そいつに勝てないと弟子にはしてやらないぞ」

「ハラシヨー！！！」

「クソ、うるさいし、めんどくさい技ばかり使う。クソッ！どつすれば！？」

次回、正義の味方 アクアビットマン

十八話 唸れ！鉄拳！！ハラシヨーパンチ！！！！

果たしてネギ君はこのうるさい男を倒すことが出来るのか！？

では、また今度^^

十八話 授業と修行と、時々弟子入り（前書き）

皆さん、お盆はどうお過ごしだったでしょうか？

私は久しぶりに大掃除をする事が出来たので、多少満足しております。

というわけで、

ここからは古王様のボイスで

よう、全国のコジマ汚染者たち……水没王子だ……
投稿日が遅れたが……まあ許してくれ。

これから魔法先生ネギまのコジマ汚染を再開する……
他の連中は温過ぎる。所詮は二次制作なんだ。だろ？

十八話 授業と修行と、時々弟子入り

ネギ君達がエヴァに弟子入りを頼んで（私が押し付けて）五日後。どうやらネギ君は古菲に弟子入りして中国拳法を習っているらしい。

「さてと……物体がその運動状態を維持しようとする性質を何という。近衛」

「慣性やな」

「正解だ。では慣性の法則とは物体に力が働いている、働いていないまたはつりあっている……どっちの時の法則だ。桜咲」

「えー？えつと……龍宮どつ　龍宮は教えなくて良いぞ　うぐつ」

「残念だったな刹那。まあ頑張ってくれ」

「……………働いていない時？」

「こつちに聞くな。まあ正解だ。つりあっているという事も忘れるなよ」

さて、皆さんも知つての通り私も一応先生なので授業中です。

「慣性の法則が当てはまる物体は、静止している物は静止し続ける。では運動している物体はどのような運動を続ける？……佐々木」

「えっ！わ、私！？……えつと……回転運動？」

「……等速直線運動だ。テストに出すからな」

『はい』

確かに無重力空間で回転しだしたらずっと回ってはいいるが……

「さてと、残りは五分か。じゃあ今日の授業はここまでだ」

『ヤッター！』

「ちゃんと復習しておくように、あまり騒ぐなよ」

『はい』

こういう時だけは素直になる。まあそんなところが中学生らしいが

……

『おい、ゼロ』

「ん？エヴァか？魔力が無いのに何で念話ができる？」

『ふむ、私も分からないが、超鈴音の科学で説明がつくらしい』

「そうか。それでどうした？」

『いやなに、坊やの弟子入り試験が日曜日の0時に決まったからな』

「明後日、実質明日か？」

今日は金曜日。と言う事は明日の24時ということにもなる。ふむ、弟子入り試験は茶々丸さんに一撃入れることなのだろうか？

『それで……だ。貴様もその時に招待しようと思っただけな』

「ふむ、別に暇だから構わない」

『そうか、ならば楽しみにしている（ニヤリ）』

……何か嫌な予感がするが……まあ気にしないでいよう。

そして運命の日

「おい、エヴァ」

「む、来たか」

「ヨートーラスジャネエカ。ドウシタ？才前モ見物カ？」

「まあそんなところだ。茶々丸さんもこんばんは」

「こんばんは、セロ先生」

世界樹の前にある広場に向かうと既にエヴァ達一行は着いていた。
余程暇のようだ……

「何か失礼な事を考えてなかったか？」

「いや、それよりもネギ君の弟子入り試験って何だ？」

「ふふふ、直ぐに分かるさ」

「しかしマスター、ネギ先生がセロ先生に一撃当てる可能性は0・
00001パーセントです」

……ん？私に一撃当てる可能性？

「エヴァンジェリンさん！弟子入り試験を受けに来ました！！」

「よく来たな坊や。条件はこの前言った通り、このアホに一撃入れることだ」

「はい？」

「むろんハンデとして直径一メートルのこの円から奴が出たら坊やの勝ちだ。貴様が手も足も出さなくたばればそれで試験は終了だ」

「その条件で良いんですね」

「ああ」

「いや、私は一言も聞いていないんだけど……」

「今言っただけだから」

最低だこのロリババア……全く、厄介な事になった。

「ちなみに、ゼロ……もし貴様が手を抜いたら貴様の部屋にいる可愛くないペットは爆発処分だ」

……え？

「超鈴音が作った爆弾だ。あのガラスケースだけを綺麗に吹っ飛ばしてくれるだろうな」

「ネギ君、どうやら本気で挑まなくてはならないらしい。負けても泣くなよ」

「は、はい！」

鎧土竜達を人質に使うとは……奴は鬼か！？（一応吸血『鬼』である）

『頑張れネギ君！』

『大人気ないぞ先生！！』

『頑張つてなネギ君！ゼロ先生もな！』

ギャラリーで味方なのは木乃香と……桜咲だけらしい。

「では、始めるがいい！！」

と言つても私は一メートル以上は動けないからな。ネギ君の動きを待つかない。

「契約執行・90秒間・ネギ・スプリングフィールド!!」

え？魔法ありなのか!!

「仕方あるまい。少々本気で行かせて貰うぞ」

ネギ君が右拳で私の鳩尾を狙ってくる。それを私は右手で上に跳ね上げてそのままハイキック。ネギ君はそれをしゃがんで避けると私の足を狙って足払いを仕掛けてくる。

『やった!』

ギャラリーからは勝利を確信した声が聞こえるが、一応私も戦争を生き残った人間なんでな。このぐらいでは負けない。

私は跳びそのままハイキックの勢いを生かした左足による後ろ回し蹴りでネギ君の肩を蹴る。

「クッ!」

「おっと、ここから出たら私の負けか」

ネギ君は四メートルぐらい後ろに飛ばされ倒れる。危うく追撃を仕掛けるところだった。

「(チツ、この程度か)坊や、それが貴様の實力だ。顔を洗って出直して来い」

「おい、エヴァ……ネギ君はまだ来るぞ？」

「なに？」

「へへ、エヴァンジェリンさんはボクがくたばるまでと言いましたからね。セロさん、一撃入れるまでやらせてもらいますよ」

「なっ!？」

「はあ、これはエヴァが悪いな。まあ良いか。では、続きといこうか」

はてさて、何時間かかる事だか……

「はあ、はあ、はあ」

「まだ続けるかい？諦めても誰も君を貶すまい」

既にネギ君の体は限界のようで立つのが精一杯のようだ。

「……ボクには……どうしても……」

「遂げたい事がある……か」

……彼も一人の男ということか。全く、目標などの自分がやらないといけない事がある人間ほど面倒なものはない。

「では、ネギ君……ここから先は何も問わない。拳で語れ」

先ほどから見ていた数名の生徒の中ではネギ君を止めようとしている声もあるが……一人の男が拳を振るっているのだ。ならばこちらも全力で答えなければなるまい。

「ハア!!」

「無駄だ!」

ネギ君の右手から繰り出される攻撃を右手で受け流し、左手でネギ君の顔面を……

「……なっ!?!」

居なかった。そこに居るはずのネギ君は存在せずに私の左手が何も無い空間を切り裂く。

何処だ?

彼は何処にいる。

「はっ!」

「チツ!?!」

声のした方向は私の上。ネギ君は足で私の頭を狙ってくる。さすがに素手で弾くには時間がかかりすぎる。思わず私は前方に跳び、彼の攻撃を避ける。

「（スプリングフィールドの血……という奴が。全く、いきなり成長する）……これは、私の負けで良いのか？ エヴァ」

「（……あの動き、一瞬だけだったが……まあ私の弟子にするには十分か）ふっ、まあまだまだだが……合格だ」

「ありがとうございま……す」

ネギ君が倒れると周りに居た全員が彼の元へ走りよる……これもスプリングフィールドの血か？

「エヴァ、私のペットは殺すなよ」

「ふん、別に本気で殺すわけではなかった。そもそも爆弾など仕掛けてもない」

「そうか……それでは私は帰らせてもらおうぞ」

「ああ……こんど坊やの特訓をする。その時は」

「分かった。その時は私も参加しよう」

「近衛木乃香にも魔法を教えなければなるまい」

「そうだな……では明後日にも」

「……確かにあんなにポコポコにされたら明日は無理だろうな」

「エヴァがそのように差し向けたのだろう」

「ふん、あのような攻撃でやられるようなら私の弟子にはいらん」

「……どうやらネギ君には辛い修行になりそうだな。こんな師匠じゃ……」

「なんだと!？」

「ははは、じゃあな」

私はブーブー言っているエヴァを置いて自分の部屋に戻る。

多少のイレギュラーがあったが、これでネギ君はエヴァの弟子になる。そうなれば……

「学園祭……か」

??? Side

『……………どうだ？目標は予定通りになったか？』

『多少のイレギュラーがあったが……どうやら不死の魔法使いの弟子になった』

『ハツハツハ、英雄の息子が悪の代名詞の弟子とはな。面白いのう』

『……………今の所は、彼の思惑通りというわけか』

『こちらの戦力は？』

『全戦力には及ばないが、数日なら魔法世界の勢力に匹敵する』

『……………残り約二ヶ月か。大丈夫なのか？メルツエル』

『案ずるなよジュリアス。まもなく、彼はこちらに戻る。そうなれば、我々の出番だ……………』

十八話 授業と修行と、時々弟子入り（後書き）

はい、とうとう????のメンバー二人の名前が分かりました。

もう一人も一応会話していて、口調からだいたい分かるのでは？b
y
o
o
r
m
e
l
社
員

これからは????の会話が入ってくると思います。

まあ色々伏線（と私は考えている）があるので……

一応ラストも大体考え付いています。（しかし執筆速度は遅い）

そんな下らない作者ですが、これからもよろしくお願いします^^

では次回予告（もうそろそろ、これいらない？と思い出した作者）

第十九話 正義の味方、アクアビットマン

麻帆良学園に迫り来る黒き影、その名は……

「やあ、一話ぶりだな」

「げ、ゲイヴンだ！助けてくれ！！アッー」

お願い、死なないでトールラス！あんたが今ここで倒れたら、木乃香
やエヴァとの約束はどうなっちゃうの？

APはまだ残ってる。ここを耐えれば、ゲイヴンに勝てるんだから！

次回、第十九話 トールラス死す

という嘘予告を考えながらニヤニヤしていた作者orz

では、また今度^^

十九話 学園祭の始まり（前書き）

遅くなってすまないが……まだ完結していないのでな

本当に遅くなってしまい申し訳ありません。

少々リアルのほうが忙しかったもので……

リアルなんてクソくらえだ!!

今後は一応早めに投稿する予定ですが、不定期更新と考えていただければ幸いです。

では十九話目です。どうぞ

十九話 学園祭の始まり

「久しぶりに帰ってきてみれば、既に学園祭の始まる前……か」

「これが旧世界の、JAPANの祭りというものか？セロ」

「ああ、それにしてもすまないな。急な頼みで……」

「いや、構わないさ。貴方の頼みならば。それに……噂の神鳴流とも戦ってみたいからな」

「それが目的ではないのだが」

ネギ君の弟子入り試験が終わってから直ぐに私は私用に魔法世界に出かけていた。学園は出張という事にしてもらい休んだ。

「ふふふ、楽しみだな」

そしてさっきから私と喋っているのは私が呼んだ助っ人。名前はアンジエ。少々戦闘狂の所があるが腕は一級品だ。学園祭では色々と忙しくなると思ったので連れてきた。

「さてと、学園長は帰ってきたらそのまま世界樹広場まで来てくれと言っていたな」

「祭りというものも見てみたいが、仕事だからな。行く」

「まあ行きながらも多少は見られるさ」

『お、どうやら最後の待ち人が来たようじゃな』

「私達が最後か」

「ふむ、それにしてもこのリンゴ飴とやはらな美味い」

アンジェ、少しは真面目にしてくれ。まあリンゴ飴なんぞ買ってやった私が悪いのだが……世界中広場には既にネギ君やタカミチを含む有力な魔法先生が揃っていた。

「すみません学園長。少々遅れました」

「ふおっふおっふお、大丈夫じゃ。ワシの予想よりも早いぐらいじゃ。ところで、その後ろでリンゴ飴を食べている女性は誰じゃ？」

「彼女はアンジェ、私が用意した助っ人です」

「それは頼もしいのう。よろしく頼みますぞ」

「問題ない。任せろ、ぬらりひょん」

……

「さ、さて、今日先生方に集まってもらったのはとある噂の事についてじゃ」

学園長。涙を拭いてください。

「セロ君やアンジエ君が来る前にある程度話しておいたのじゃが、二人は世界樹伝説を知っておるかな？」

「世界樹伝説？世界は世界樹で出来ていてこの世界はその枝でしかないとかいう御伽噺ですか？」

「私は世界中を護るために三人の勇者達が戦う話しか知らんな」

「セロ君の言ったような神話でもなく、アンジエ君が言った某RPGのようなことではなく。この学園に伝わる伝説じゃよ」

「知らんな」

私とアンジエが二人同時に答えると学園長は苦笑する。仕方ないだろう。学園祭前に行っただから……

「まあ簡単に言うのなら、生徒達が告白するとそれが絶対に叶ってしまうのじゃ。それを防いで欲しいのじゃ」

「分かりました」

「……斬ってもいいのか？」

「やめる」

それにしても告白妨害か。何か悲しいな……

「既に生徒達の間では広がっているようじゃからの。先生方、よろしく頼むぞい！」

「……………ん？」

「どうした、アンジエ？」

アンジエが袋に入れていた刀を取り出す。

「見られています」

近くに居た魔法生徒である佐倉愛衣が呟く。

「ああ、私の射程外だ」

悔しそうにアンジエは刀を袋に戻す。

『パチン』

サングラスをかけた先生。グラサン神多羅木がフィンガースナップと共に無詠唱の風魔法を使い、

『ボンツ！』

偵察機を破壊する。

「……生徒か？（となりに幽霊少女がいるが）」

「そのようですね。うちの生徒も侮れないな」

「ガンドルフィーニ先生、予想は？」

私は近くに居たガンドルフィーニ先生に尋ねる。

「大体見当がついています」

「アンジエ、行くぞ」

「了解した」

「高音君、佐倉君、私達も行くぞ」

「はい！」

「では、解散！！」

学園長の声と共に私達の五人は一斉に犯人の居る方向へ走る。

「ゼロ、目標は五百メートル先に屋根の上を跳んでいる」

「……科学研究部の生徒か？」

私が犯人を絞り込んでいるとガンドルフィーニ先生が答える。

「おそらく超鈴音かと思われます。高音君、佐倉君は下からの援護を頼む。私は建物の上から超鈴音を追い込む」

「私達は？」

「万が一のために控えておいて下さい。彼女だけならば私達で大丈夫なので……」

「そうか、では、手並みを見せていただくぞ？」

「「はい！」」

ガンドルフィーニと二人の魔法生徒は超鈴音を捕まえに意気込んで跳んで行った。私達二人は近くの高い建物の上から彼女達の様子を見る。

「……それにしても平和な所だな」

「いま言う言葉では無いと思うぞ。アンジエ」

「まあ、騒動の途中だが……私達のいた場所では考えられない風景だ」

「確かに……な」

行方不明になってから約十年間は……いや、今はそんな話をしていく場合ではない。

「アンジエ、超鈴音はどうなった？」

「二人の少年と一人の少女を味方にして闘っている模様。少女は剣士……神鳴流か？」

……おそらく超鈴音のシナリオ通りだろう。

『 』

そのような事を考えているとポケットに入れた携帯から着信音が鳴る。相手はガンドルフィーニ。

「私だ」

『セロ先生、超鈴音はこちらで捕まえました。こちらは大丈夫なので他の見回りをお願いします』

「了解した。何かあったらすぐに連絡してくれ」

『ハイ！』

私は携帯を切ると世界樹の方を見る。うつすらとだが既に光を放っている。学園長や の読みどおり今年は魔力放出量が多いのだろう。

「……超鈴音の計画、上手く利用させてもらおう」

「セロ、アレは何だ!!」

眼を輝かせて屋台を指差すアンジエ。

……連れてくる人間を間違ったか？

いや、まあ良い。そう、全ては私のシナリオ通りなのだから……

麻帆良祭 一日目

私は告白する生徒達の妨害を行うために世界樹広場に来ている。ア
ンジエは別の所で妨害行為を行う事になっている。まあおよそ屋台
を食べ歩きするだけだと思っが……

そんな私が今どのような状況下におかれているかという……

『よっしゃー！今日こそアンタをぶっ飛ばして見せるぜ！！』不良寺
『へへへ、流石に百人規模だとアンタでも勝てないだろうよ！』不
良寺

「全く、私はどんなに好かれているんだ？」

久しぶりに学園に帰ってきたら直ぐにこれだ。まあ取り敢えず全員
ぶん殴って（体罰？暴力？ふん、関係ないな）気絶させる。所詮は
素人の集まりだ。大した障害にもならない。

「アイヤ、久しぶリアルね。セロ先生、いや、トールス・レイレナ
ード」

少々芝居がかった少女の声が後ろから聞こえる。それは私が知る人
物であり、私の生徒。

「やあ、超鈴音。いや、未来人さん」

私の言葉に一瞬驚いたが直ぐに元の笑顔に戻り話しかけてくる。

「さすが元々死人アルネ。やはりこの世の常識には縛られないの力
ナ」

「死んではいないがね。十数年行方を晦ましていただけだ。それで
何のようだい？超鈴音」

「いやいや、少々取引がしたくてネ。話し聞いてくれないカナ？」

「ふむ、大丈夫だ。君がこれから起こす事については邪魔しない」

「!？」

「何故、知っているかと言いたい様な顔だね。まあ其処は関係ない。今は取引、だろ？」

「……そうだね。じゃあ貴方は何をこちらに要求するの力ナ？」

「今日始まる、武術大会。その予選に私と私が連れてきた女性を登録しておいて欲しい」

「?……それだけ？」

「ああ、もし予選に通ることが出来たらとある組み合わせ通りに作ってもらいたい。それぐらい安いものだろう?。」

「(この人は武術大会を私が買収する事をしっている……) 分かったネ」

「もしこの約束がちゃんと果たされた時には、君の計画に有効的な行動を取らせてもらうよ」

「有効的な行動？」

「それはまだ教えられない。じゃあまた今夜にも会おう。超鈴音」

超鈴音 Side

何故、彼は私が行動を起こすと知っていたのか……未来から来た人間だと分かっていたのか……考えれば考えるほど分からない。

しかし、彼は口約束だが私の行動を邪魔しないと伝えてくれた。

それが嘘であれば私の計画は終わる。それは仕方ない事ネ。

さて、後は私のご先祖様がどういう行動に出るかカナ。

願わくは……敵対せずに進んで欲しいカナ……

??? Side

『どうやら超鈴音が行動を起こすようだ』

『ほう、手配は?』

『既に向かわせている。ハリ、PQ、真改だ。問題は無いだろう』

『ワシはお留守番か?』

『貴方は流石に姿をさらすわけには行きませぬので。銀翁』

『若い者にはまだまだ負けんのじゃがのう』

『貴方のアーティファクトを、まあ我ら全員に言える事だが、麻帆良や連合に知られる訳にはいきませぬので』

『私もお留守番というわけか?』

『ジュリアス、彼の命令だ。仕方あるまい……』

『そうか。では我らは』

『ああ、帝国、連合に……』

十九話 学園祭の始まり（後書き）

本当に更新が遅くなってしまっって申し訳ありません。

さて、十九話では??? Sideの人間が分かってきました。

勘の鋭い人はこの先の展開が読めてくるのかな？

それにしても今日で地球が滅ぶようです（笑）

皆さん気をつけましょう。

では、次回予告、第二十話 正義の味方、アクアビットマン

麻帆良の学園祭に紛れ込んだ恐怖の人物。それは、この男だった！！

興「全ては私のシナリオ通り、目的は君の肉 だ……」

興「そうだ。肉 ハメハメだ。私のレイヴンとして相応しい肉 か

…試させてもらおうぞ」

興「待て。私が生きた証を、レイヴンとして生きた証を…最後に残させてくれ」

興「何という事を…が、しかし…ハメさせてくれ」

興「いかん！撤退するな！ハメさせてくれ」

興「待ってくれ、地上最後のレイヴンとして、ハメさせてくれ」

興「頼む。ハメさせてくれ」

「もうダメじゃ…！この世の終わりじゃ…！」

「学園長！落ち着いてください…！」

「た、タカミチ君！君が相手をしてやってくれい」

「ちよ！おまつ！？」

『『アッー』』

第二十話、ゲイヴン現る

出来るだけ早く更新できるように頑張ります(汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9578q/>

魔法粒子コジマ

2011年10月28日13時58分発行